

与那国方言について

加治工 真 市

1. 方言区画上の位置

沖縄本島と宮古島の間を流れる黒潮は、単に地理的に沖縄本島と先島諸島を分断しているだけでなく、言語的にも両者を区画する大きな等語線として流れている。この等語線を境にした南の島々（宮古・八重山諸島）で話されている方言を先島方言という。一口に先島方言と言っても、実は、それぞれの方言は独自の言語体系を有する、変化に富んだ方言であるため、それぞれの方言だけでもっては、互いに意志の疎通を図ることはできない。それは、地域を八重山諸島に限定してみても事情は変わらないのである。

それ故に、この地域の方言区画については、従来よりいくつかの説が提出されてきた。それをまとめて示すと次のようになる。

- (イ) 仲宗根政善（「琉球方言概説」『方言学講座』4 東京堂、1961）、加治工真市（「八重山方言概説」『講座方言学10 沖縄・奄美の方言』国書刊行会 1984）、上村幸雄（「琉球列島の言語（11）与那国方言」『言語学大辞典』第4巻〈世界言語編下2〉亀井孝、河野六郎、千野栄一編 三省堂 1992）
- (ロ) 平山輝男・大島一郎・中本正智（『琉球方言の総合的研究』明治書院 1966）。
- (ハ) 上村幸雄（『方言学概説』p.106 国語学会編 武蔵野書院 1962）。
- (ニ) 外間守善（「沖縄の言語とその歴史」『岩波講座日本語11、方言』岩波書店 1977）。

(イ)、(ロ) の区画説には類似点が認められ、ともに (ハ)、(ニ) の区画説と対立を示している。ところで (ハ) 説は「この方言が、南グループの八重山方言に属する方言から変化して生まれたものであることは、比較によって明らかである（表1の祖納の用例参照）」（『言語学大辞典』第4巻〈世界言語編下2〉 p.783）とあることから、(イ) 説は更に補強されたことになる

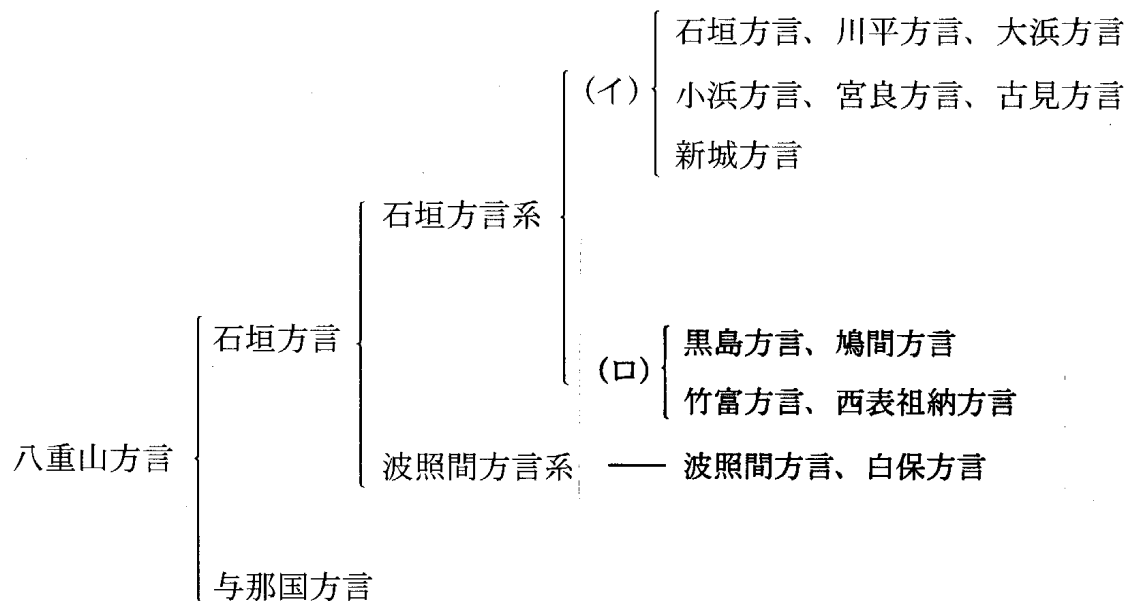
と考えられる。(二)は、基本的には(八)に従いつつも八重山方言の下位区分を詳細に行なった点に特色が認められる。方言意識を大幅に採用した下位区分で、そこに独自の見識が示されている。

(八)の特徴は、与那国方言を先島方言に対立する特殊な方言と位置づけた点にある。そして、琉球方言全体を、Ⅰ奄美・沖縄方言群、Ⅱ先島方言群、Ⅲ与那国方言、の三つに大きく区画する点にある。この区画説は『沖縄語辞典』(国立国語研究所 1963)にも認められる。このように、与那国方言が特異な方言として重視される理由は、主として次の言語現象に求められている。つまり、与那国方言独特の音韻現象であり、しかも古態を保存するとされるヤ行音のダ行音化や、ワ行音のバ行音化、および無気喉頭化音などがそれである。

ところで、これらの言語現象を逐一検討してみると、たとえば語頭におけるワ行音のバ行音化は先島方言に共通する特徴であり、しかも与那国方言においては、語中、語尾においてもこの音韻法則が徹底している。鳩間方言は、その点でも与那国方言に近い。これらは音韻の古態を示すものと考えられ、上村幸雄氏が既に指摘されたところである。

次に、ヤ行音のダ行音化の法則は、語頭以外では成立せず、与那国方言においてのみ、新しく発生した音韻現象であることが判明している(柴田武『全国方言資料11 琉球編Ⅱ』NHK編 1972)。

また、与那国方言における無気喉頭化音の生成過程を分析検討すると、八重山方言と深く関係することが知られる。因に、竹富方言では、[k'i ~ çiki](月)、[k'ara ~ çikara](力)、[k'uru ~ kk'uru](袋)、[t'a ~ ʃita](舌)、[p'uŋ](降る)、[p'asaduru ~ Φupasadaru](暗い)のように、語頭の母音が無声子音に挟まれると無声化し、脱落することにより無気喉頭化音が生成されることがある。与那国方言は、この音韻現象が徹底したすえに完成された無気喉頭化音素であるといえる。このように考えを進めてくると、八重山方言の区画説は(イ)説が最も妥当のように考えられる。従って、ここでは(イ)説に従いつつ、八重山方言の区画を次のように示す。



2. 音韻

与那国方言の特徴を音韻の側面から述べると次のようにまとめることができる。まず第一に、母音音素が /i, a, u/ の3個しか認められず、琉球方言の中でも際立った特徴を示している。第二には、子音音素において喉頭化音素と非喉頭化音素の対立が認められることである。第三には、音素 /ŋ/ が認められ、/g/ との対立が認められることである。音素 /ŋ/ は、琉球方言では喜界島方言にも認められるが、他では認められない音素である。全国的に見ても東北方言や土佐方言に認められる音韻で、奈良時代中央語の濁音の流れを受け継ぐものと考えられている。与那国方言の場合、それは語中における力行音の濁音化現象と、同じく濁音の鼻濁音化現象とが並行しており、はるか東北の音韻現象との関連の深さを示すものと考えられる。第四にあげられる特徴は、与那国方言には拍音素の /q/ が認められないことである。このことも琉球方言において、他に例の認められない特徴で、いわゆるモーラ方言に対するシラビーム方言といわれるものである（柴田武：1959、1972）。音声的には明瞭に現われることもあるが、それは無気喉頭化音に伴って現われたり消失したりするような、音韻的に有意味でない音声現象であることが知られている。おそらく直後の子音が無気喉頭化するために、本来ならば無気喉頭化音の属性として気音を必要としないにもかかわらず、一方では促音である

ための子音の持続部形成に一定の口腔内の呼気圧と舌根の緊張が要求されるという、調音生理学的矛盾が促音そのものの消失を促進したものと考えられる。尚、長音音素 /r/ も与那国方言では認められない。例えば、ア「サ [aːsa] (石蓐、海岸の岩に生える海草、食用となる)、カ [ka] (井戸)、ガ [ga] (自我)、キ [ki] (木)、ク [ku] (線香)、サ [sa] (茶)、ス [su] (帳簿)、タ [ta] (田)、チ [ci] (釣り針)、ティ [ti] (手)、トゥ [tu] (十、唐)、ナ [na] (名前)、ニ [ni] (荷)、ヌ [nu] (野原)、ハ [ha] (葉)、ヒ [hi] (屁)、フ [hu] (幸運)、ミ [mi] (肉)、ワ [wa] (豚) (『与那国ことば辞典』池間苗著 1998年) 等の語は、他の八重山方言では、長音化して二拍語となるのが普通である。アナヒラダ (穴柱家)、ダトゥク (床)、チムヌダ (炊事場)、カタングヤ (茅葺貫家)、ダヌハン (家紋)、バリヌシ (疲れ直し)、ドゥントゥヒラ (裏柱)、ミタヤティ (鶏小屋)、ウチ・ンマヌダ (牛馬小屋)、カラダ (瓦葺家) (『与那国島の民俗と暮らし—第一分冊—住居・墓・水—』与那国町教育委員会 2000年) の諸語も他の八重山諸方言では長音化する語である。与那国方言の話者達が表記した例であるから、同方言話者の意識が、これらの表記上に反映しているものと考えられる。シラビーム方言と言われる所以である。

3. 音素体系

与那国方言の音素体系は次のように示すことができる。

母音音素 : /i, a, u/ (3個)

半母音音素 : /j, w/

子音音素 : /h, ʻ, ɸ, k, g, ŋ, T, t, d, n, ɕ, s, z, r, p, b, m/

(17個)

拍音素 : /N/ (1個)

3.1 母音音素

与那国方言には /i, a, u/ の3個の母音音素しか認められず、他の諸方言のように狭母音、半狭母音、広母音の対立を示さない。母音音素の示差的特徴は、(イ) 広母音か、狭母音か、(ロ) 狭母音であれば、前舌母音か、奥舌母音か、のようにまとめられる。

3.1.1 舌狭母音 /i/

音素 /i/ は [ji]、[ʔi]、[ei] の異音を有する。[ei] は文末に現われ、特に強調する際に、たとえば [sagei] (酒だよ!) のように発音される。次に最小対立する語例を示す。

- /kidi/[kidi] (傷) ……①
- /kudi/[kudi] (釘) ……②
- /biru'N/[biruŋ] (植える) ……③
- /buru'N/[buruŋ] (折る) ……④
- /mi'N/[miŋ] (水) ……⑤
- /mu'N/[muŋ] (麦) ……⑥
- /ti'i/[ti:] (手) ……⑦
- /tu'u/[tu:] (十) ……⑧
- /Ti'i/[t'i:] (口) ……⑨

3.1.2 奥舌狭母音音素 /u/

音素 /u/ は、[ʔu]、[wu]、[ɔu] のような異音を有する。[ɔu] は、たとえば [anuŋ kagundɔu] (私も書くよ) のように、強調表現として文末に現われる。次に最小対立する語例を示す。

- /du'u/[du:] (湯) ……①
- /di'i/[di:] (字) ……②
- /nuŋu'N/[nuŋuŋ] (脱ぐ) ……③
- /niŋu'N/[niŋuŋ] (願う、祈る) ……④

3.1.3 中舌広母音音素 /a/

音素 /a/ は、[ʔa]、[a] の異音を有する。母音の前に立つ [ʔ] は、与那国方言では示差的特徴ではない。また [a] は中舌広母音という、最も安定した母音である。次に最小対立する語例を示す。

- /naru'N/[naruŋ] (鳴る) ……①
- /niru'N/[niruŋ] (煮る) ……②

/ 'aru'n/['a'ruŋ] (洗う) ……③

/ 'iru'n/['iruŋ] (要る) ……④

3.2 半母音音素

半母音音素には /j/ と /w/ が認められる。これまでの調査資料によれば、/j/ は語頭に立つことはないが、/h, ' , k, k, g, ŋ, T, t, d, n, č, s, z, r, p, b, m/ のすべての子音音素と結びついて拍を構成することができる。また、/w/ も /ŋ, m, č, r/ 以外のすべての子音音素と結びついて拍を構成することができる。

3.2.1 音素 /j/

/j/ と最小対立する語例を示すと次のようになる。

/ 'a'ja/['a]ja] (蟻) ……①

/ 'ada/['a]da] (痣) ……②

/ 'aju'n/['a]juŋ] (喧嘩する) ……③

/ 'aru'n/['a'ruŋ] (洗う) ……④

3.2.2 音素 /w/

/w/ と最小対立を示す語例をあげると次のようになる。

/ 'waru'n/[w]aruŋ] (いらっしゃる) ……①

/ baru'n/[b]aruŋ] (割る) ……②

3.3 子音音素

与那国方言の子音音素の対立関係を示すと次のようになる。

3.3.1 頭音素 /h/, /' /

喉頭音素 /h/ と /' / の示差的特徴は、前者が喉頭無声摩擦音であるのに対し、後者は喉頭有声音である点に認められる。次に語例を示す。

/ hi'i/[çi:] (屁) ……①

/ 'i/[(')i:] (胃) ……②

- /ha'a/[ha:] (歯) ……③
 /'a'a/[(?)a:] (粟) ……④
 /hu'u/[ɸu:] (帆) ……⑤
 /'u'u/[(?)u:] (それ) ……⑥

3.3.2 軟口蓋音素 /k/ ; /ɕ/

軟口蓋における無声破裂音は、有気非喉頭化と無気喉頭化という特徴をもって対立する。つまり、無気喉頭化の有無が示差的特徴であるといえるのである。次に語例を示す。

- /kamu'N/[kamuŋ] (噛む) ……①
 /kamu'N/[k'amuŋ] (搦む) ……②
 /kariru'N/[kariruŋ] (枯れる) ……③
 /kariru'N/[k'ariruŋ] (聞こえる) ……④
 /kuru'N/[kuruŋ] (殺す、なぐる) ……⑤
 /kuru'N/[k'uruŋ] (作る) ……⑥
 /ku'N/[kuŋ] (来る) ……⑦
 /ɕu'N/[ɕuŋ] (吹く) ……⑧

以上は軟口蓋無声破裂音における無気喉頭化が示差的特徴を示すべく対照してあげたものである。次にこれらの音素を含む拍の体系を示すことにする。

/ki/	/ka/	/ku/	/kja/	/kju/	/kwa/
[k'i]	[k'a]	[k'u]	[k'ja]	[k'ju]	[k'wa]
/ki/	/ɕa/	/ku/	/ɕja/	—	/kwa/
[k'i]	[k'a]	[k'u]	[k'ja]	—	[k'wa]

それぞれの拍を含む語例は、次の通りである。

- /ki/ ; [k'i:] (木)
 /ka/ ; [k'adi] (風)
 /ku/ ; [k'ui] (声)
 /kja/ ; [k'jaŋ] (痒い)
 /kju/ ; [k'ju:] (旧暦)

/kwa/ ; [k'wai] (肥)
 /ki/ ; [p'jak'in] (親雲上)
 /ka/ ; [k'anun] (飼う)
 /ku/ ; [k'urun] (作る)
 /kja/ ; [k'ja:] (聞け)
 /kwa/ ; [k'wa:n] (低い)

3.3.3 軟口蓋音素 /g/ ; /ŋ/

軟口蓋破裂音のうち、/k/ ; /g/ は無声対有声で対立しているが、さらに /g/ ; /ŋ/ は、口むろ音対通鼻音という特徴で対立している。この場合は鼻音の有無が示差的特徴となっている。次に最小対立する語例を示す。

/ʼagiruʼn/[ʼ(?)agirun] (開ける) ……①

/ʼaŋiruʼn/[ʼ(?)aŋirun] (上げる) ……②

/haguʼn/[hagun] (吐く) ……③

/haŋuʼn/[haŋun] (剥ぐ) ……④

/g/、/ŋ/ を含む拍の体系は次の通り。

/gi/、	/ga/、	/gu/、	/gja/	——	/gwa/
[gi]	[ga]	[gu]	[gja]	——	[gwa]
/ŋi/、	/ŋa/、	/ŋu/、	/ŋja/	——	——
[ŋi]	[ŋa]	[ŋu]	[ŋja]	——	——

次に /g/、/ŋ/ の拍を有する語例を示す。

/gi/ ; [girra] (しゃこ貝)

/ga/ ; [garatʼi] (鳥)

/gu/ ; [kagu] (掻く)

/gja/ ; [nagja] (泣け)

/gwa/ ; [gwai] (反抗)

/ŋi/ ; [naŋirun] (投げろ)

/ŋa/ ; [(?)aŋarun] (上がる)

/ŋu/ ; [tuŋun] (研ぐ)

/ŋja/ ; [kuŋja] (漕げば)

3.3.4 硬口蓋音素 /č, z, s/

硬口蓋で調音される音素は、それぞれ破擦か、摩擦かで対立し、さらに摩擦音であるとするれば有声か無声かで対立している。次にそれぞれの音素について略述する。

3.3.4.1 音素 /č/ について

/č/ は音声的には硬口蓋無声破擦無気喉頭化音 [tʃ̥] である。しかし、この無気喉頭化という特徴は意味弁別に関与しない。いわば剰余的特徴であるにすぎない。従って、/k/ や /T/ などとは異なるわけで、音素記号を特に工夫する必要もない。ただ、ここでは音声事実を表現する意味で /č/ を用いて示す。次に最小対立する語例を示す。

/č i'N/[tʃ̥'in] (炭)

/si'N/[ʃin] (千)

/ča'a/[ts'a:] (草)

/ču'u/[ts'u:] (昼)

/su'u/[su:] (今日)

3.3.4.2 音素 /z/ について

/z/ は硬口蓋摩擦音音素であり、有声という特徴でもって /s/ と対立している。これまでの資料によると、語例も極めて少なく、従って拍体系も不安定な姿を示している。おそらく新しい音韻として定着しつつあるものであろう。音声的には語頭において [dza]、[ɟza] と実現されるのみで、語中、語尾の語例が認められない。また、母音 [i]、[u] と結合して拍を構成する語例も認められない。次に語例を示す。

/za/ ; [dzaçi] (蛇皮、三味線の一種)

/zja/ ; [ɟjak'u] (雑魚、鯉の餌)

3.3.4.3 音素 /s/ について

/s/ は [s]、[ʃ] の異音を有する。[s] は母音 [a]、[u] の前に立ち、[ʃ] は母音 [i]、[a]、[u] の前に立つことができる。[i] の直前に立つ [ʃ] は、音声学的に前舌狭母音に同化されたものと解され、[s] とは相補関係にあると言えるから、音韻的には /s/ と認められる。それに対して [a]、[u] の前の [ʃ]

は、同じ音声環境で [s] に対立して現われる。これは他の音素とも並行的であるから、問題の [ʃ] は音韻的に /sj/ と解される。ちなみに拍体系とその語例を示すと次の通りである。

/si/、	/sa/、	/su/、	/sja/、	/sju/、	/swa/
—	[sa]	[su]	—	—	[swa]
[ʃi]	—	—	[ʃa]	[ʃu]	—

/si/ ; [ʃindirun] (信じる)

/sa/ ; [sat'i] (先、尖端)

/su/ ; [sunat'i] (正月)

/sja/ ; [p'irafan] (潰した)

/sju/ ; [([?])a:fu] (位階名称)

/swa/ ; [swa'ŋ] (苦い)

3.3.5 歯茎音素 /r/

/r/ は、震え音という特徴でもって /t/、/d/、/n/ と対立している。また /r/ が語頭に立つことも、これまでの資料では認められない。次に語例を示す。

/ri/ ; [narirun] (慣れる)

/ra/ ; [([?])irara] (鎌)

/ru/ ; [barun] (割る)

3.3.6 歯茎音素 /t, T, d, n/

歯茎音素は口むろ音か、鼻むろ音かで大きく対立する。口むろ音の /t, T, d/ は、有声音か、無声音かで対立し、無声音の /t, T/ はさらに無気喉頭化音か、有気非喉頭化音かで最小対立を示す。

3.3.6.1 音素 /t/

/t/ を含む拍体系と語例を示すと次のようになる。

/ti/、 /ta/、 /tu/、 /tja/、 /tju/、 /twa/

[ti] [ta] [tu] [tja] [tju] [twa]

/ti/ ; [tidan] (太陽)

/ta/ ; [tagan] (高い)

/tu/ ; [tʉdʉtʉuŋ] (届く)

/tja/ ; [tja:ri] (手合いがいい)

/tju/ ; [tju:] (呉れ)

3.3.6.2 音素 /T/

先ず、齒莖における [t] と [tʉ] の最小対立を示す語例を次にあげる。

/Tiʉ/[tʉi:] (口) ……①

/tiʉ/[ti:] (手) ……②

/Taʉa/[tʉa:] (舌) ……③

/taʉa/[ta:] (田) ……④

/Tuʉu/[tʉu:] (人) ……⑤

/tuʉu/[tu:] (十) ……⑥

次に /T/ を含む拍体系と語例を示す。

/Ti/、 /Ta/、 /Tu/、 /Tja/、 /Tju/、 /Twa/

[tʉi] [tʉa] [tʉu] [tʉja] [tʉju] [tʉwa]

/Ti/ ; [tʉi:] (月)

/Ta/ ; [tʉai] (額)

/Tu/ ; [tʉumutʉi] (つとめて、朝)

/Tja/ ; [katjaŋ] (書いた)

/Tju/ ; [aja: ʃitʉju:tandi] (たかが知れている)

/Twa/ ; [utʉwanuŋ] (落さない)

3.3.6.3 音素 /d/

まず /d/ が最小対立を示す語例をあげる。

/diʉ/[di:] (字、地) ……①

/tiʉ/[ti:] (照る) ……②

/daʉa/[da:] (家) ……③

/taʉa/[ta:] (田) ……④

/duʉi/[dui] (夕食、夕飯) ……⑤

/tuʉi/[tui] (鳥) ……⑥

/d/ を含む拍体系と語例を示すと次の通りとなる。

/di/、 /da/、 /du/、 /dja/ ——— /dwa/

[di] [da] [du] [dja] — [dwa]

/di/ ; [diŋ] (錢、お金)

/da/ ; [daigu] (大工)

/du/ ; [duru] (夜)

/dja/ ; [kudjaŋ] (漕いだ)

/dwa/ ; [dwaŋ] (弱い)

3.3.6.4 音素 /n/

/n/ は歯茎において通鼻音という示差的特徴を有し、次のような最小対立を示す。

/na'a/[na:] (名) ……①

/da'a/[da:] (家) ……②

/ta'a/[t'a:] (田) ……③

/n/ を含む拍体系と語例は次の通りである。

/ni/、 /na/、 /nu/、 /nja/ — /nwa/

[ni] [na] [nu] [nja] — [nwa]

/ni/ ; [ni:di] (右)

/na/ ; [naguda] (次男)

/nu/ ; [nuguruŋ] (残る)

/nja/ ; [([?])nnjaŋ] (見た)

/nwa/ ; [nwa:k'wa] (これは何だ)

3.3.7 両唇音音素 /p、b、m/

両唇音音素には /m/ が通鼻音という特徴でもって、口むろ音の /p、b/ と対立し、口むろ音はさらに無声破裂音か、有声破裂音かで対立している。

3.3.7.1 音素 /p/

/p/ の具体音声は常に両唇喉頭化破裂音 [p'] として実現される。しかし、この喉頭化という特徴は意味の弁別に関与せず、従って示差的特徴ではない。その点、/k/ などにおける喉頭化の特徴とは機能を異にする。/p/ を含む拍体系と語例を示すと次のようになる。

/pi/、 /pa/、 /pu/、 /pja/ — /pwa/

[p'i] [p'a] [p'u] [p'ja] — [p'wa]

/pi/ ; [p'iraʃaŋ] (潰した)

/pa/ ; [p'anⁿɲai] (鋏)

/pu/ ; [([?])anamp'u] (穴)

/pja/ ; [p'jak'in] (親雲上)

/pwa/ ; [p'wa:ŋ] (洗い)

3.3.7.2 音素 /b/

/b/ は有声の両唇破裂音である。/p/ における喉頭化が剰余的特徴であったから、両唇における /p/、/b/ の対立は、有声と無声の対立と言える。次に /b/ を含む拍の体系と語例を示す。

/bi/、 /ba/、 /bu/、 /bja/、 /bju/、 /bwa/

[bi] [ba] [bu] [bja] [bju] [bwa]

/bi/ ; [bigimit'a] (雄鶏)

/ba/ ; [baruŋ] (割る)

/bu/ ; [bunu] (斧)

/bja/ ; [tubjaŋ] (飛んだ)

/bju/ ; [bjuruŋ] (中毒する)

/bwa/ ; [bwa:riruŋ] (疲れる)

3.3.7.3 音素 /m/

両唇において、/m/ と最小対立を示す語例を示せば次の通りとなる。

/ma'i/[mai] (前)

/ba'i/[bai] (倍)

/m/ を含む拍体系及び語例は次の通りである。

/mi/、 /ma/、 /mu/、 /mja/ — —

[mi] [ma] [mu] [mja] — —

/mi/ ; [mi:] (目)

/ma/ ; [maguŋ] (蒔く)

/mu/ ; [muduruŋ] (戻る)

/mja/ ; [dumja] (読みなさい)

3.3.8 拍音素 /N/

与那国方言の拍音素は /N/ のみである。同方言では /q/ は認められない。音声的には、無気喉頭化音に伴なって促音が現われることもあることがあるが、非成節的なもので、消失したりするから、それはむしろ喉頭化音に付随した剰余的特徴とみられる。促音が消失した理由については、「2 音韻」の項の第四の特徴で述べておいたので、ここでは繰り返さない。拍音素 /N/ について述べる。

/N/ には [m]、[n]、[ŋ] の異音が認められる。そして、それぞれは後続の子音によって条件づけられている。たとえば、

/ˈNmi/[m̥mi] (爪) ……①

/ˈNbi/[m̥bi] (尻) ……②

/ˈNni/[n̥ni] (稲) ……③

/ˈNta/[n̥ta] (土) ……④

/ˈNda/[n̥da] (お前) ……⑤

/ˈNkadi/[ŋ̥kadi] (百足) ……⑥

①～⑥により、[m、n、ŋ] が後続の子音によって条件づけられていることがわかる。従って、ここでは音声 [m、n、ŋ] の違いは示差的特徴とはなり得ず、拍音素 /N/ を設定するためには、さらに次の手続きを経ることが必要となる。つまり、

/ˈNkadi/[ŋ̥kadi] (百足) …… (イ)

/#kadi/[kadi] (風) …… (ロ)

/ˈNbai/[m̥bai] (小便) …… (ハ)

/#bai/[bai] (倍) …… (ニ)

/ˈNnaga/[n̥naga] (真中) …… (ホ)

/#naga/[naga] (仲) …… (ヘ)

(イ) ～ (ヘ) は、次の関係式で示すことができる。

(イ) ; (ロ) = (ハ) ; (ニ) = (ホ) ; (ヘ) = /N/ ; /#/ (# = ゼロ)。

/N/ の有無が (イ) ; (ロ)、(ハ) ; (ニ)、(ホ) ; (ヘ) の示差的特徴となっていることが証明されるのである。

4. 音韻対応

4.1 母音の対応

与那国方言の母音音素は /i、a、u/ の三個である。これについては既に述べた。これらを国語（奈良時代中央語、東京方言）との対応関係で示せば次の通りとなる。

（国語、東京方言）；ア、イ、ウ、エ、オ、アイ、アウ

（与那国方言）； a、 i、 u、 i、 u、 ai、 u

ただし国語の /s/、/z/、/c/ の後にたつ /u/ は、与那国方言では /i/ に対応する。これは八重山方言全般についても同様である。/s、z、c/ は調音点、調音方法の両面から後続の母音を同化させやすいと言えるからである。次に語例を示す。

/ 'a'a / [(?) a :] （粟）

/ 'agu'i / [(?) agui] （あくび）

/ 'iti / [(?) it'i] （息）

/ 'isuŋu'N / [(?) isugun] （急ぐ）

/ 'ami / [(?) ami] （雨）

/ 'asi / [(?) aʃi] （汗）

/ 'uči / [(?) utʃi] （臼）

/ kubu / [kubu] （蜘蛛）

/ 'uTu / [(?) ut'u] （音）

/ čina / [tʃina] （砂）

/ čiči / [tʃitʃi] （煤）

/ kidi / [kidi] （傷）

/ kadi / [kadi] （風）

/ 'a'i / [(?) ai] （藍）

/ 'a'idi / [(?) aidi] （合図）

/ ku'N / [kuŋ] （買う）

/ kurukudi / [kurukudi] （黒こうじ）

4.2 子音の対応

与那国方言の特徴的な子音音素の対応関係をあげると次のようになる。

4.2.1 語頭におけるカ行子音の対応

語頭におけるカ行子音の特異な音韻現象は、イ段における対応関係に現われてくる。語頭のカ行イ段音は与那国方言ではサ行イ段音に対応する。そして後続の子音が鼻音である場合、語頭のサ行音が後続の鼻音に融合同化して次のように鼻音化する。

[ʃiːbusan] (来たい)

[nˈnu] (昨日「伎能布」万、3777)

[nnani] (衣「伎奴」万、4022)

4.2.2 語中におけるカ行子音の対応

与那国方言では、母音間のカ行子音は有声化する。これは他の八重山方言にも散見される音韻現象であるが、与那国方言の場合は実に規則的であり、特にイ段においては、奈良時代中央語のカ行イ段甲類に対して、与那国方言ではタ行イ段音 ([ti]) が対応、乙類に対してはガ行イ段音 ([gi]) が対応する。次に語例を示す。

キ甲；[tuti] (時、「等伎甲」万、793)

[duti] (雪、「由伎甲」万、893)

[sati] (岬、「佐伎甲」万、3993)

キ乙；[(ʔ)ugirun] (起きる、「於己乙立」紀、顕宗前紀)

4.2.3 語中のガ行子音の対応

母音間のガ行子音は与那国方言では、ガ行鼻濁音化 (カ° [ŋa]、キ° [ŋi]、ク° [ŋu]…) する。そして、そのイ段音はダ行音 ([di]) 化する。これは、カ行子音のそれと並行的であり、まとめて示すと次のように記述することができる。

(1) 母音間の /k/ は /g/ となる。ただし、/i/ の前では /t/ となる。

(2) 母音間の /g/ は /ŋ/ となる。ただし、/i/ の前では /d/ となる。

ガ→ [ŋa] ; [aŋaruŋ] (上る「安我流」万、4433)

ギ→ [di] ; [kudi] (釘「久枳甲作之」万、4390)

[nukudi] (鋸)、[ni:di] (右)

グ→ [ŋu] ; [kuŋuŋ] (こぐ「許乙具」万、3622)

[haŋuŋ] (剥ぐ「波伎」万、3886)

ゲ→ [ŋi] ; [kaŋi] (影「加気乙」万、4469)

[haŋiruŋ] (禿げる)

ゴ→ [ŋu] ; [maŋu] (孫)

4.2.4 サ行子音の対応

サ行子音の特徴的な対応現象は、イ段とウ段において現われる。ア段において子音は最も安定した姿を見せ、エ段とオ段においてはそれぞれ e → i、o → u の音韻変化を起こした姿を示している。この音韻変化の流れがイ段、ウ段に働くため、サ行イ段音は破擦音化し (ただし例外的に力行音化するものもある)、同じくウ段音は破擦の無気喉頭化音へと変化した姿を現すことになる。

サ→ [sa] ; [satt'a] (砂糖)、[sagi] (酒)

シ→ [ki] ; [kirja] (為ろ)、

→ [tʃ'i] ; [kutʃ'i] (櫛)、

ス→ [tʃ'i] ; [tʃ'ina] (砂)、[tʃ'itʃ'i] (煤)

セ→ [fi] ; [(ʔ)afi] (汗)、[fiβaŋ] (狭い)

ソ→ [su] ; [suba] (側)、[sudatiruŋ] (育てる)

4.2.5 ザ行子音の対応

国語のザ行子音は、与那国方言では破裂音の [d] に対応する。つまり、有声の摩擦音は弱摩擦音も含めて、有声の破裂音に変化しているのである。これもサ行音のタ行音化と並行して、ザ行音のダ行音化したものである。次に語例を示す。

ザ→ [da] ; [(ʔ)ada] (あざ)、[dat'uk'u] (床の間)

ジ→ [di] ; [(ʔ)adi] (味)、[kudira] (鯨)

ズ→ [di] ; [kidi] (傷)、 [tʃidiri] (硯)
 ゼ→ [di] ; [diŋ] (銭)、 [kadi] (風)
 ゾ→ [du] ; [midu] (溝)、 [kudu] (去年)

4.2.6 タ行子音の対応

タ→ [ta] ; [taŋan] (高い)
 チ→ [tʃ'i] ; [tʃ'i:] (乳)
 → [t'i] ; [nut'i] (命)
 ツ→ [tʃ'i] ; [tʃ'ira] (面)
 テ→ [ti] ; [ti:] (手)
 ト→ [tu] ; [tu:] (十)

4.2.7 ダ行子音の対応

ダ→ [da] ; [daigu] (大工)
 ゼ→ [di] ; [di:] (地)
 ゾ→ [di] ; [tʃ'idikiruŋ] (続ける)
 デ→ [di] ; [tunidiruŋ] (とび出る)
 ド→ [du] ; [duŋu] (道具)

4.2.8 ナ行子音の対応

ナ→ [na] ; [naŋ] (波)
 ニ→ [ni] ; [niruŋ] (煮る)
 ヌ→ [nu] ; [nunu] (布)
 ネ→ [ni] ; [tani] (種)
 ノ→ [nu] ; [nuruŋ] (乗る)

4.2.9 ハ行子音の対応

与那国方言では、ハ行子音は [h] であり、[p] 音にはならない。ハ行子音で特徴的な音韻変化を起こすのは、イ段音とウ段音である。イ段音においては、ハ行子音は硬口蓋音の [çi] となるため、サ行子音のそれと同様の音韻

変化を起こして [tʃ'i] となる。ウ段においては両唇音 [ɸu] であるが、後続の子音が鼻音のとき、融合同化して鼻音となり、ハ行オ段音と区別される。次に語例を示す。

ハ→ [ha] ; [hai] (蠅)、[maiha] (前歯)
 ヒ→ [tʃ'i] ; [tʃ'ix] (火)、[tʃ'idiŋka] (肘)
 フ→ [n] ; [nni] (船)
 ヘ→ [çi] ; [çi] (屁)
 ホ→ [ɸu] ; [ɸuni] (骨)、[ɸu:] (帆)

4.2.10 マ行子音の対応

マ→ [ma] ; [mami] (豆)
 ミ→ [mi] ; [miŋ] (水)
 ム→ [mu] ; [mura] (村)
 メ→ [mi] ; [mi:] (目)
 モ→ [mu] ; [munu] (物)

4.2.11 ヤ行子音の対応

国語のヤ行子音は、与那国方言では語頭において次のように対応するが、語中、語尾ではその対応関係は成立しない。

ヤ→ [da] ; [da:] (家)、[dagun] (焼く)
 [uja] (親)、[hajan] (早い)
 ユ→ [du] ; [du:] (湯)、[duti] (雪)
 [maju] (眉)、[ɸuju] (冬)
 ヨ→ [du] ; [dui] (夕飯)、[du:tʃi] (四つ)

与那国方言の子音は、イ段において次のような音韻変化を起こしている。つまり、 $k > t$ 、 $g > d$ 、 $ʃ > tʃ$ 、 $tʃ > tʃ'$ 、 $ʒ(dʒ) > d$ の音韻変化である。この傾向は全体的に前舌母音 [i] に引かれて軟口蓋破裂音は硬口蓋破裂音へ、硬口蓋摩擦音は硬口蓋破裂音へと変化していくことを意味する。とすれば、母音の体系変化が子音の体系変化に関与する際、有声の弱摩擦音 [j] が [dʒ(ʒ)] の音韻変化と並行的に、 $j > d$ の音韻変化を起こしたものと考えられ

る。

4.2.12 ラ行音の対応

ラ→ [ra] ; [mura] (村)

リ→ [ri] ; [ts'uri] (薬)

→ [i] ; [hai] (針)

ル→ [ru] ; [kuruma] (車)

レ→ [ri] ; [kariruŋ] (枯れる)

ロ→ [ru] ; [kukuru] (心)

4.2.13 ワ行音の対応

国語のワ行音は与那国方言では次のように対応する。

ワ→ [ba] ; [bata] (腹)、[bagaŋ] ; (若い)

エ→ [bi] ; [bixruŋ] (酔う「恵比」記、応神)

ヲ→ [bu] ; [bunu] (斧「斧乎能、一言_二与岐_一」和名抄)

[butu] (夫)、[buŋ] (居る)

語頭における以上のようなワ行音の対応関係は宮古、八重山方言に共通する音韻現象である。これは語中、語尾においても、例えば、

[bixnna] (植えるな「宇恵多気乙」万、3474)

[ʔibiruna] (植えるな) (鳩間方言)

のように、その対応が認められる。本来のワ行音は音声環境にかかわらず [b] と対応しているが、いわゆるハ行転呼した語中、語尾のワ行音に対しては、唇音退化してワ行音 [b] の対応関係を示さない。

4.3 拍音素の対応

与那国方言の拍音素は、次に示すように、後続の子音に同化されて形成されたものであるといえる。いわゆる進行同化である。

4.3.1 ク→ /N/ の例

[mmu] (雲)、[mmuŋ] (汲む)

ク→/N/のような進行同化が可能なのは、母音の体系的な三母音化に伴う ko→ku の音韻変化の結果、ku→ϕu を経過して ϕu→/N/ の同化現象が起きたものと考えられる。4・3・2 の例は、その傍証となろう。

4.3.2 フ→/N/ の例

[nni] (舟「不禰」万、1048)、[ŋgui] (鞆丸「布久利」和名抄)

4.3.3 ヒ→/N/ の例

[ŋgi] (髻「比甲宜乙」万、892)

4.3.4 ツ→/N/ の例

[nnuŋ] (角)、[nna] (綱)、[mmi] (爪)、[mbi] (尻「つび《屎》陰門」和名抄)

4.3.5 シ→/N/ の例

[nniruŋ] (死ぬ)

4.3.6 ム→/N/ の例

[ŋkadi] (百足)、[ŋk'atʃi] (昔)

4.3.7 ア→/N/ の例

[mmuŋ] (編む)

4.3.8 イ→/N/ の例

[(?)nduŋ] (言う)、[(?)nni] (稲)、[mbai] (尿)

4.3.9 ウ→/N/ の例

[mma] (馬)、[nda] (君)

5. 無気喉頭化音素について

与那国方言の無気喉頭化音素の生成については、(1) 母音の無声化によ

る拍の脱落、(2) 音韻の融合同化という、二つの要因が考えられる。次の例を見られたい。

[tʃ'iri] (霧「紀乙利」万、799) …… (イ)

[ts'un] (切る「伎甲流」万、892) …… (ロ)

[ts'un] (着る「伎甲世難爾」万、901) …… (ハ)

[k'un] (聞く「企甲久」万、841) …… (ニ)

[k'uruŋ] (作る「都久里」万、4122) …… (ホ)

[k'un] (吹く「布久」万、51) …… (ヘ)

(イ) ~ (ハ) と、(ニ) ~ (ヘ) は同じくカ行子音に対応するものでありながら、頭子音が [ts'(tʃ')] と [k'] で対立している。対応関係から言えば、(イ) ~ (ロ) は語頭子音 [ts'(tʃ')] が国語の語頭子音「キ」に対応するのに、(ニ) ~ (ホ) はそれと異なる。「企久」、「都久里」、「布久」の第一拍が脱落しており、その代償として、続く子音に無気喉頭化という特徴が付与されている。

つまり、無声子音に挟まれた狭母音が無声化して脱落するところに無気喉頭化音の成立する要因が認められよう。この手続きを経て成立する無気喉頭化音音素の語例として次のようなものをあげることができる。

[t'i:] (月)、[t'i:] (口)

[t'i:] (聞き)、[t'i:] (弾き)

[t'ai:] (舌)、[t'ai:] (額)

[t'aint'u] (二人)、[t'utʃi] (一つ)

[k'a:ŋ] (深い)、[k'ai] (使い)

[k'uru] (袋)、[k'uruŋ] (作る)

無気喉頭化のもう一つの要因と考えられるのが (イ) ~ (ハ) の語例で示した融合同化の現象である。これは例えば、

[ts'an] (風)、[ts'a:ŋ] (広い)

[ts'ariruŋ] (精げる)、[ts'uda:ri] (白い)

[ts'un] (知る)、[ts'u:ma] (昼間)

等の諸例でも知られるように、頭子音が無声子音である場合、それと結合した狭母音 [i]、[u] に続く母音間の [r] が音韻変化を起こして [s] となる。それに伴って狭母音 [i]、[u] は無声子音に挟まれることになる。その結果、

母音は無声化し、第1拍が脱落することになる。その代償として第2拍の子音 [s] が破擦音、またはその無気喉頭化音 [ts'] が生成されると言えよう。このことは、次の語例によって、さらに補完される。

[ts'a:ŋ] (臭い)、[ts'a:] (草)

[ts'arirun] (腐れる)、[ts'u:ri] (薬)

与那国方言の昔話

語り手：宮良 節氏

録音・文字化：加治工真市

録画：加治工正枝

1. ンディ マチリヌ⁽¹⁾ ウグリ⁽²⁾

[ndi 「ma(t)tʃ'irinu」 uguri]

比川祭の由来

ン「カチ」 ⁽³⁾	トゥ「マヤヌ」 ⁽⁴⁾	マイバラヤ	ダマドゥ ⁽⁵⁾	「アイ」ブイティ ⁽⁶⁾
ŋ「katʃi」	tu「majanu」	maibaraja	damadu	「ai」buiti
昔	泊家の	前の方は	山で(ぞ)	あって、

ウヌ	ダマヤ	「フー」ティンキヌ	ディク ⁽⁷⁾ イヌ	キカ ⁽⁸⁾ ドゥ	ミムトゥ
unu	damaja	「fu:」tiŋkinu	diŋquinu	kiŋadu	mimu「tu
その	山(に)は	大きな	デイゴの	木が(ぞ)	三本

ムイ「ブタンカ」ドゥ ⁽⁹⁾	マタ	ウヌ	フガニ	グマ「ル」	キティン「タ」ン
mui「butaŋka」du	mata	unu	ɸugani	guma「ru」	kitin「ta」n
生えていたが、	また	その	ほかに、	小さな	(小)木なども

「マー」シク	「ムイ」ブル	ダマドゥ	「アイ」ブタ	ルン「ディドゥ
「ma:」ʃiku	「mui」buru	damadu	「ai」buta	run「didu
たくさん	生えている	山で(ぞ)	あった	とさ。

アル	バス「ニ」	ミン「カ」	とウイヌドゥ ⁽¹⁰⁾	ウヌ	マイ「サル」	キーンキ
aru	basu「ni」	minu「ka」	t'uinudu	unu	mai「saru」	ki:ŋki
ある	とき	女	一人が	その	大きな	木に

ウ「リ」ワイ「ティ」 ⁽¹¹⁾	ンニャ	ウ「ヌ	とウヤ	ハダニ	ミ「ティドゥ」 ⁽¹²⁾
u「ri」wai「ti」	nnja	u「nu	t'uja	hadani	mi「tidu」
降りてこられて	みると	その	人は	肌	に神酒を

マーミラリ	ママドゥ ¹	ウ ¹ リ ¹ ワイシ ¹ 「てィ ¹ ー	クン ¹ ニヤ
ma:mirari	mamadu ¹	u ¹ ri ¹ waiʃi ¹ ʔi ¹ :	kun ¹ nija
塗られた	ままに	降りていらっしゃって	こんなでは

ナラヌン ¹ ディ	ム ¹ 「てィ ¹ ワイ	ス ¹ 「ル ¹	ミツ ¹ 「てィ ¹	くミ ¹ 「てィ ¹³
naranun ¹ di ¹	mu ¹ ʔi ¹ wai	su ¹ ru ¹	mit ¹ ʔi ¹	k'umi ¹ ʔi ¹
いけないと	お持ちになって	来られた	神酒を	包んで

ビンク ¹ イ	カシヌ	ハドゥ	ムン ¹ 「チッてィ ¹	ウ ¹ 「ブル ¹⁴	くイティ ¹ 「ガラ ¹⁵
bingui	kafinu	hadu	mun ¹ ʔʃit ¹ i ¹	u ¹ buru ¹	k'uiti ¹ gara ¹
くわず芋の	広い	葉を	むしり取って、	柄杓を	作ってから

く ¹ 「ミ ¹ ワイ ¹ 「ティドゥ ¹	タギムトゥ	ヤーヤ	「ウヌ	バスヤ ¹
k'u ¹ mi ¹ wai ¹ ʔidu ¹	tagimutu	ja:ja	ʔunu	basuja ¹
(神酒を)包まれて、	竹本	家は	その	ときは

ウヤ ¹ 「ギン ¹ とゥ	アタバ	「ウヌ ダンキ ¹	ハイ ¹ 「バドゥ ¹	とウンキヌ
uja ¹ gin ¹ ʔu	ataba	ʔunu daŋki ¹	hai ¹ badu ¹	ʔunkinu
金持ちの人で	あったので、	その 家に	入ると	人への

チンチン ¹ 「トゥン ¹	ミンヌンキ	ナガン ¹ 「キ ¹	ワーリンディン ¹ 「トゥン ¹
ʃintʃin ¹ ʔum ¹	minun ¹ ki	nagan ¹ ki ¹	warindin ¹ ʔun ¹
礼儀すら	ないので	中へ	いらっしゃいという

とウグイン ¹ 「トゥン ¹⁶	ミ ¹ 「ヌタバ ¹⁷	ハ ¹ 「イ ¹	ク ¹ 「ミ ¹	ブイ ¹ 「ガラヤー ¹
ʔuguin ¹ ʔum ¹	mi ¹ nutaba ¹	ha ¹ i ¹	ku ¹ mi ¹	bui ¹ garaja ¹
一声とても	なかったので	ああ、	ここ	居ては

ア「ヌドゥ」	ンナヌカタライ ⁽¹⁸⁾	キリバン「ディ」 ⁽¹⁹⁾	ウムイティ「ドゥ」
a ^ˈ nu ^ˈ du ^ˈ	n ^ˈ na ^ˈ nu ^ˈ ka ^ˈ ta ^ˈ rai	ki ^ˈ ri ^ˈ ba ^ˈ n ^ˈ ˈdi ^ˈ	u ^ˈ mu ^ˈ i ^ˈ ti ^ˈ ˈdu ^ˈ
私を(ぞ)	見ないふりを	するんだと	思って(ぞ)、

ウン「カラ	アガバタヌ」	トゥマヤン「キ」	ナガヒンチガラ	バッ「てィ」
u ^ˈ n ^ˈ ˈka ^ˈ ra	a ^ˈ ga ^ˈ ba ^ˈ ta ^ˈ nu ^ˈ	tu ^ˈ ma ^ˈ ja ^ˈ n ^ˈ ˈki ^ˈ	na ^ˈ ga ^ˈ hi ^ˈ n ^ˈ ˈci ^ˈ ga ^ˈ ra	ba ^ˈ ˈt ^ˈ i ^ˈ
それから	東側(隣)の	泊家に	中へだててから	割って

アラ「シ」ワイ「てィ」	トゥマヤン「キ」	ワリヤー ⁽²⁰⁾	ナガン「キ」
ara ^ˈ ˈʃi ^ˈ ˈwai ^ˈ ˈti ^ˈ	tu ^ˈ ma ^ˈ ja ^ˈ n ^ˈ ˈki ^ˈ	wa ^ˈ ri ^ˈ ja ^ˈ	na ^ˈ ga ^ˈ n ^ˈ ˈki ^ˈ
いらっしゃって、	泊家に	行かれると、	中へ

かい「ル	かい ⁽²¹⁾ ル	ン「ディ」	サーン	ウヤ「シ」ワリ
k ^ˈ ai ^ˈ ˈru	k ^ˈ ai ^ˈ ˈru	n ^ˈ ˈdi ^ˈ	saːn	u ^ˈ ja ^ˈ ˈʃi ^ˈ ˈwa ^ˈ ri
「お上り下さい、	お上り下さい」といって、	お茶も	召し上り下さい、	

サ(ッ)「キン」	ウヤ「シ」ワリ	ン「ディー」	マ「タ」	イー
sa ^ˈ ˈk ^ˈ i ^ˈ n ^ˈ	u ^ˈ ja ^ˈ ˈʃi ^ˈ ˈwa ^ˈ ri	n ^ˈ ˈdiː	ma ^ˈ ˈta ^ˈ	iː
酒も	召し上り下さい」と、		また、	ご飯も

カティムヌーンたん	イルイル	ダン「ダン」	ちなシ ⁽²²⁾	シ(ッ)くり「ガタ
ka ^ˈ ti ^ˈ mu ^ˈ nuːn ^ˈ ˈta ^ˈ n	i ^ˈ ru ^ˈ i ^ˈ ru	da ^ˈ n ^ˈ ˈda ^ˈ n ^ˈ	tʃi ^ˈ ˈna ^ˈ ʃiː	ʃi ^ˈ ˈk ^ˈ ˈk ^ˈ ˈu ^ˈ ri ^ˈ ˈga ^ˈ ta
おかずも	いろいろ	数々	とり揃え、	調理(作り方)を

キー」	トゥリムてィー	イグ「ガ」	ワルバン ⁽²³⁾	「ワイ」トゥラ「シー」 ⁽²⁴⁾
kiː	tu ^ˈ ri ^ˈ mu ^ˈ t ^ˈ iː	i ^ˈ gu ^ˈ ˈga ^ˈ	wa ^ˈ ru ^ˈ ba ^ˈ n	ˈwai ^ˈ ˈtu ^ˈ ra ^ˈ ˈʃiː
して	もてなして、	何日(幾日)	いらっしゃっても、	いらっしゃって

ワリーンディ ⁽²⁵⁾	ムてィナたばー	ク「ヌ	とゥヤー」	ウヌ
wari:ndi	mut'inat'aba:	ku'nu	t'uja:'	unu
下さいと	もてなしたので、	この	人は	この

「ダヌ」	とゥン「タヌ」	クグルムティ	ム「てヤ」ンディ ⁽²⁶⁾
'danu'	t'un'tanu'	kugurumuti	mu'tja'ndi
家の	人たちの	(親切な) 心持ちを	持っている

ウムイスミティー	「イーグ」ガ	ワ「タン」ディヤ	バガラヌ「ガー」
umuisumiti:	'i:gu'ga	wa'tan'dija	bagaranu'ga'
深く思い染めて	何日	おられたとは	わからないが、

アヌ「ヤー」	ニン「ギンヤ」	アラ「ヌ」ンディ	ティン「ガラドゥ
anu'ja'	niŋ'ginja'	ara'nu'ndi'	tiŋ'garadu
私は	人間では	ないといって、	天から(ぞ)

かい ⁽²⁷⁾	ダ「ラシ」ワイ「ビー」 ⁽²⁸⁾	クヌ	ムラ「ヌ」	とゥン「たヌ
k'ai'	da'rafi'wai'bi'	kunu	mura'nu'	t'un'tanu
使い	遣らしておられて、	この	村の	人たちの

クラシガタ」	ンニ「ティ」	クンディドゥ	ダラ「シワイ」ビ(一)「ドゥ」
kuraŋigata'	nni'ti'	kundidu	dara'ŋiwai'bi'du'
暮らし方(生活)を	見て	来いと	遣らされたので

ス「たガ」 ⁽²⁹⁾	ン「ディガ」	クグル	ムトゥンニ「ドゥ」	ニン「ギンヤ
su'taga'	n'diga'	kuguru	mutunni'du'	niŋ'ginja
来たが、	貴方達が	心を	持つように(ぞ)	人間は

ブイ ⁽³⁰⁾ ナルドー		ンディ ¹	アヌ ¹ 「ヤ ¹	スー ¹ 「ヤ ¹
bui ¹ narudo:		ndi ¹	anu ¹ 「ja ¹	su ¹ 「ja ¹
居られる (生きられる) のだよ		とって、	私は	今日は
ティン ¹ 「キ ¹	カイ	「シヒ ¹ ラヌトウヤ	ナラ ¹ 「ヌリヤー ¹	アン ¹ 「カ ¹
tiŋ ¹ ki ¹	kai	「ſiçi ¹ ranutuja	nara ¹ 「nurja: ¹	aŋ ¹ 「ŋa ¹
天へ	帰って	行かないと	いけないから、	私が
トゥマ ¹ 「タル ¹	チル ¹ 「チニ ⁽³¹⁾	クヌ	ダヤ ¹ ー	トゥマ ¹ 「ヤンディー
tuma ¹ taru ¹	tſiru ¹ tſini	kunu	daja: ¹	tuma ¹ jandi:
泊った	印(しるし)に、	この	家は	泊家と
ナーツキ ¹	トゥラ ¹ 「エー ¹ イ	マ ¹ 「タ ¹	ダーハンヤ ⁽³²⁾	てイーヌ ⁽³³⁾
na:kk'i ¹	tura ¹ je: ¹ i	ma ¹ ta ¹	da:hanja	t'i:nu
名づけて	あげようね。	また	「家判」(家紋)は	月の
バガディキヌ	「ハンドウ	き ⁽³⁴⁾	トゥラ ¹ 「シ ¹ ワイ ¹ 「てィ	
bagadikinu	「handu	k'i: ¹	tura ¹ ſi ¹ wai ¹ t'i:	
若月(三ヶ月)の	判(家紋)を	つけて	下さって	
マ ¹ ー	「フガラサンディ ¹	アナ ¹ 「ガー	ナルた ¹	トゥリムてィ
ma: ¹	「fugarasandi ¹	ana ¹ ga:	naruta ¹	turimuti
また	ありがとうといって、	あんなに	長くなるまで	接待して、
「ハイクムン	リップパニ ¹	ハミ ¹ 「ビ	カバラヌン ⁽³⁵⁾ ぎ	ティンキ ¹
「haimunun	rippani ¹	hami ¹ bi	kabaranun ¹ gi	tiŋki
食べ物も	立派に	食べて	変わらないので	天へ

カイシー	「ヒー」	ヒン「トゥー	ムティ「ヒラリ	「フガラサ」
kaiʃi:	ʃi:	çiⁿtu:	mutiⁿçirari:	ʃuɣarasaⁿ
帰して	よい	返事を	持って行かれて、	ありがとう

ン「ディ」	ン「ディ」ワイ「ティ」 ⁽³⁶⁾	ティン「キ」	アン「カイ」
nⁿdiⁿ	nⁿdiⁿwaiⁿtiⁿ	tiŋⁿkiⁿ	aŋⁿɳaiⁿ
と	言われて	天へ	上って

カイ「シ」ワタ「ルン」ディー	ウン「カラドゥ」	トゥ「マヤヤ」	ン「ディムラニ」
kaiⁿʃiⁿwataⁿruⁿdi:	uŋⁿkaraduⁿ	tuⁿmajajaⁿ	nⁿdimuraniⁿ
帰って行かれたとき。	それからが	泊家は	比川村に

カミサマガ	トゥ「マイ」ワタル	ダーンディ	トゥマ「ヤ(一)ン」ディ
kamisamaŋa	tuⁿmaiⁿwataru	da:ndi	tumaⁿjaⁿnⁿdi
神様が	泊られた	家だと、	泊家といって

「ン」ダリ	マ「タ」	ウ「ヌ	ユンガラドゥ」	マ「ちリン」
ⁿnⁿdari	maⁿtaⁿ	uⁿnu	juŋgaraduⁿ	maⁿtʃⁿiriŋⁿ
言われ、	また、	それ	故に(ぞ)	祭も

キー「ブルンディ」 ⁽³⁷⁾	マタ」	ハ「ディミ	ウリ「ワタル	ドゥグ「ルニドゥ」
ki:ⁿburundi	mataⁿ	haⁿdimi	uriⁿwataru	duguⁿruniduⁿ
しているってさ。	また、	最初に	降りられた	所に(ぞ)

ビディ「リヤ」	タ「てィ」	ウガミ「てィドゥ」	トゥマ「ヤニン」
bidiⁿrijaⁿ	taⁿtʃiⁿ	uŋamiⁿtʃiduⁿ	tumaⁿjaninⁿ
霊石は	建てて	拜んでから(ぞ)、	泊家にも

ドワイ「キ」⁽³⁸⁾

dwai「ki」

祝いをして

ハブ「ディ」

habu「di」

先祖

ダイダイ「ニ」

daidai「ni」

代々に

ティディ「キリ」⁽³⁹⁾

tidi「kiri」

続けて

ナイバ「ギ」ン

naiba「gi」n

今までも

マ「ちりドゥグルドゥ

ma「tj'iridugurudu

祭り所と(ぞ)

ナイ「ブル」ユ「ー

nai「buru」ju」:

なっておりますよ。

《語訳》

- (1) [ndimattf'iri] (比川祭り)。「比川」は集落名。与那国島の南海岸に開けた村。
- (2) [uguri] (起こり)。語中、語尾のカ行音 [k] が法則的に [g] となる現象。
- (3) [ŋkatʃi] (昔)。マ行ウ段音 [mu] が撥音 /N/ となり、サ行イ段音 [ʃi] が法則的に破擦音 [tʃi] となる現象。
- (4) [tumaja] (「泊家」)。固有名詞。
- (5) [damadu] (山ぞ)。ヤ行頭子音が語頭において法則的に [d] となる現象。[du] 《ぞ》は係助詞(強調)に対応し、連体形結びとなるのが一般であるが、係り流れの現象が見られる。
- (6) [aibuiti] (であって)。「ai」は動詞 [aŋ] (ある)の連用形。「buiti」(をりて)は、動詞「居り」の連用形 [bui] に接続助詞「て」が下接したものの。「あり・居り・て」に対応する形式である。
- (7) [di^ŋuinu] (デイゴの)。「o」母音が [u] 母音になり、語中・尾の濁音が法則的に鼻濁音(鼻音化)化する現象である。従って -go- → -^ŋu- となり、入りわたりの前鼻音 [-ŋ] を伴うことになる。さらに、[-^ŋu-] と [-i-] は音位転倒したものである。
- (8) [ki^ŋadu] (木がぞ)。ガ行音が語中・尾で鼻濁化する現象。注(7)参照のこと。
- (9) [muibuta^ŋadu] (生えていたが《ぞ》)。ムイブタの [mui-] は「萌え」に対応する。
- (10) [t'uinudu] (一人が《ぞ》)。「t'u-」は無気喉頭化音で、音素である。これは [çitor] (一人)の第1拍の前舌狭母音 [i] が無声子音に挟まれて無声化した結果、第1拍が脱落して形成されたものである。
- (11) [uriwaiti] (下りてこられて)。「waiti」は、「行く、来る、居る」の尊敬語、「いらっしゃる」に対応する語で、上代中央語の「おはす」に対応する「おもしろ語」の「おわる」系統の語である。その接続形「おわりて」が [waiti] となったもの。
- (12) [mit'idu] (神酒を《ぞ》)。「miti」(神酒)の [ti] は、奈良時代中央

語の力行イ段甲類に対応するもので、[duti] (雪「由岐甲」)、[sati] (岬「佐伎甲」) のように法則的に対応する。

- (13) [k'umiti] (包んで)。第1拍の [ɸu] の脱落により、無気喉頭化したもの。
- (14) [uburu] (檳榔樹の葉で作った水汲み用の、柄のない柄杓)。鳩間方言では [ʔu^hmu^hru]。
- (15) [k'uiti^hgara] (作ってから)、第一拍の [tsu] の狭母音 [u] が無声化して脱落した結果、無気喉頭化音 [k'] が生成されたもの。
- (16) [t'uguitum] (一声ととも)。^h[t'ugui] は第1拍の [çi] が脱落した結果、無気喉頭化したもの。[-tum] (ととも) は副助詞「すら」「さえ」に相当する。
- (17) [minutaba] (なかったので)。形容詞ミンヌン [minuŋ] (無い) の過去形。
- (18) [nnanukatarai] (見ないふりをする)。^h[nnuŋ] (見る) の未然形 [nnanu] (見ない) に [katarai] (ふりをする) の下接したもの。
- (19) [kiribandi] (為るからと)。^h[kiruŋ] (為る) の已然形に接続助詞 [-ba] が下接したもの。[-ndi] (～とて、～と) は引用の格助詞。
- (20) [warja:] (いらっしると)。「行く、来る、居る」の尊敬動詞 [waruŋ] (いらっしゃる) の条件形 (已然形)。
- (21) [k'airu] (お上り下さい)。第一拍の [tsu] が脱落して無気喉頭化したもの。目上の人を案内する場合に用いられる。
- (22) [tʃ^hinafi:] (とり揃え)。不足ぶんを捜してとり揃えること。不揃いのものを完全なものにする。品揃えをする。
- (23) [warubaŋ] (いらっしゃっても)。^h[waruŋ] (いらっしゃる) の連体形に逆接の助詞 [baŋ] (～ても、～ばも) が下接したもの。
- (24) [waiturafi:] (いらっしゃって下さい)。尊敬動詞 [waruŋ] (いらっしゃる) の連用形に、補助動詞 [turafi:] (～てやれ、～してくれ) が下接したもの。
- (25) [waruŋ] (いらっしゃる) の補助動詞的用法。
- (26) [mutʃ^handi] (持っているといって)。動詞「持つ」の完了形。
- (27) [k'ai] (使い)、動詞「使う」の第一拍が脱落して無気喉頭化したもの。

連用形。

- (28) [darafi] (遣らし)。[jarafi] の [j] が語頭において [d] 音化したもの。
- (29) [sut'ana] (来たが)。動詞 [kuŋ] (来る) の過去形 [suta] (来た) に接続助詞 [ŋa] (が) の下接した形。例、[ku:] (来よう)、[kunuŋ] (来ない)、[kunna] (来るな)、[ku:t'u] (来る人)、[kuŋ] (来る)、[kuba] (来い)、[ku:] (来い)、[ji:busaŋ] (来たい)、[suŋ] (来る)、のように活用する。[-ŋa] (が) は接続助詞で逆態接続の意をあらわす。
- (30) [buinarudo:] (居られる) は、動詞 [buŋ] (居り) の連用形 [bui-] (居り) に、[naru] (～成る、～できる) が下接した形。意味的には「居り成る、居ることができる」の意。「人間として居ることができる」、「人間として生きることが可能だ」の意味に用いられている。
- (31) [tʃirutʃini] (印に)。国語のサ行イ段音、ウ段音は破擦音化する音韻法則がある。例えば [kutʃi] (櫛)、[tʃina] (砂)、[tʃitʃi] (煤)。ここは、「シルシ」の「シ」が破擦音化して、[tʃi] となったものである。
- (32) [da:haŋ] (家判)、各家には、その家の家畜や家具類に、その家の所属物であることを示す印をつけた。これが [da:haŋ] (家判、家紋) である。牛馬は、その耳朶を定められた形に切って印とした。
- (33) [tʃinu] (月の)。「月」の「ツ」の狭母音 [u] が無声子音に挟まれて無声化し、一拍分脱落することにより、カ行イ段音がタ行イ段音化して [ti] となり、それが無気喉頭化して [tʃi:] となったもの。
- (34) [kʃi:] (つけて)。注 (33) と同様に、第一拍の「ツ」が脱落したことにより、続く [k] 音が無気喉頭化したもの。「つけ」の「け」は、エ段音であるから [tʃ] とならず、[k] が直接に無気喉頭化する。
- (35) [kabarankʃi] (変わらないので)。与那国方言を含めて、八重山方言では、語頭、語中、語尾のワ行音の /w/ が /b/ に対応するのが一般である。特に与那国方言では、この音韻対応規則が徹底している。
- (36) [nʃdiʃwaiʃti] (言っておられて)。[ndi] (言って) に、[waiti] (いらっしゃって) が下接したもの。[waiti] は「おはして」が変化したもの。
- (37) [ki:ʃburundi] (為っているとて)。動詞 [kiruŋ] (為る) の接続形 [ki:-] (為て) に [buruŋ] (居る) [ndi] (引用の格助詞“と”) が下接したもの。

- (38) [dwai^hki^h] (祝いをして)。与那国方言では、語頭において /j/ が /d/ に対応する。iwai → juwai → dwai と変化したもの。与那国方言では /p, t, k, b, d, g, n, s/ の各音素に半母音音素 /w/ が結びついて拍を構成することができる。
- (39) [tidi^hkiri] (続けて)。与那国方言では、国語の破擦音 [ts] は [t]、その有声音 [dz] は [d] に対応する音韻法則があり、それによるもの。

2. クブ「ラ マちリヌ」ウグリ

[kubu「ra matʃirinu」 uguri]

久部良祭の由来

ン「カチ」	ンディ「ムラヤ」	ク「ブラニドウ」	ムラタティ	ハディミヤ ⁽¹⁾
ŋ「katʃi」	ndi「muraja」	ku「buranidu」	muratati	hadimija
昔	比川村は	久部良にぞ	村建て	始めは

「アイ」ブタルンディ「ドウ」	ンダリブル ⁽²⁾	「ムラヌ」	タティク「ティヤ」 ⁽³⁾
「ai」butarundi「du」	ndariburu	「muranu」	tatiŋgutija
あっていたとぞ	言われている。	村の	建ち始めは

ドウ「チクニドウ」 ⁽⁴⁾	クラシ	ブラルンディ「ドウ」	ンドウガ ⁽⁵⁾
du「tʃi kunidu」	kurafi	burarundi「du」	nduga
裕福にぞ	暮して	おられると (ぞ)	言うが

アル	バス「ニ」	トゥー「ヌ」	チマガラ	マーランニヌドウ ⁽⁶⁾	アル
aru	basu「ni」	tu:「nu」	tʃimagara	ma:ranninudu	aru
ある	時に	唐の	島から	マーラン船が (ぞ)	ある

ア「てィガイ」	チマヌ	イ「リサティ	ンキドウ」 ⁽⁷⁾	ン「カイティ」
at「tʃiŋai」	tʃimanu	i「risati	ŋkidu」	ŋ「kaiti」
ようで	島の	西崎の	方へぞ	向って (来るのが)

ンナリタバ ⁽⁸⁾	「ウヤンタヌ	ハナ」シヤ	ン「カチガラ」	イ「コクジン
nnaritaba	「ujantanu	hana」ʃija	ŋ「katʃigara」	i「kokudʒin
見えたので	親たちの	話では	昔から	異国人

タイコクジン ⁷	ナイ ⁽⁹⁾ 「ヌ ⁷	カイゾ ⁷ 「クヤ ⁷	ハイ ⁽¹⁰⁾ 「ラ ⁷ ンディ ⁷ 「ドゥ ⁷
taikokudjin ⁷	nai ⁷ nu ⁷	kaidzo ⁷ kuja ⁷	hai ⁷ ra ⁷ ndi ⁷ du ⁷
大国人、	今の	海賊は	追いはぎとぞ

ンダリブイ ⁷ 「ビ	ムラヌ	とウンタヤ	ヌー ⁽¹¹⁾ 「キル
ndaribui ⁷ bi ⁷	muranu	tunta ⁷ ja	nu ⁷ kiru
言われているので、	村の	人たちは	どうするの

「カヤーンディ ⁷	ウドウルてィ	「イクツツァ ⁷ 「キリ	ムヌ	カンカ ⁷ ラヌトゥ
「kaja:ndi ⁷	udurutt'i	「ikuttsa ⁷ kiri	munu	kangaranutu
だろうか	驚いて	騒動(戦)して	ものを	考えないと(思案しないと)

ナ ⁷ 「ラヌン ⁷ ディ	ム ⁷ 「ラキンミ ⁷	キル ⁷ 「タ ⁷ シ	ハナシニ	「てヤ ⁽¹²⁾
na ⁷ ranun ⁷ di ⁷	mu ⁷ rajimmi ⁷	kiru ⁷ ta ⁷ si ⁷	hanafini	t'ja:
いけないといって、	村吟味を	したところ、	話に	聞くところによると、

ンマ ⁷ 「ナガ ⁷ 「ムラニ ⁽¹³⁾	ミンヌ ⁷ 「カ ⁷ ドゥ	アイ ⁷ 「ワルンカ ⁷	ア ⁷ 「ラーグ ⁽¹⁴⁾
mma ⁷ naga ⁷ murani ⁷	minu ⁷ kadu	ai ⁷ warunna	a ⁷ ragu ⁷
島仲村に	女で(ぞ)	あられるのだが、	ものすごく(大変)、

グッタ ⁽¹⁵⁾ 「アイ	マイ ⁷ 「サル ⁷	サン ⁷ 「カ ⁷ イ ⁷ 「イス ⁷ 「バン ⁷ ディ	ン ⁷ 「ディ ⁷ 「ワル
gutta ⁷ ai	mai ⁷ saru ⁷	sanj ⁷ gai ⁷ isu ⁷ ban ⁷ di	n ⁷ di ⁷ waru
身体の	大きな	サンカ ⁷ イイスバと	おっしゃる

ブッチガ ⁷	ワ ⁷ 「ルン ⁷ ディ	ンドゥリヤ	ウヌ ⁷ 「とウヤ ⁷	ヌン ⁷ 「ニヌ	ムヌ
buttfiga	wa ⁷ run ⁷ di	ndurja ⁷	unu ⁷ t'uja ⁷	nun ⁷ ninu	munu
武士が	おられると	いうので、	その人は	いかなる(どんな)	もの

アルバン ^ㄊ	ダッてイラヌキ	チ ^ㄊ ディミ ^ㄊ	カッてイル	ンディ ^ㄊ ドゥ ^ㄊ
aruban ^ㄊ	datt'iranuki	tʃi'dimi ^ㄊ	katt'iru	ndi'du ^ㄊ
であっても	容赦なく	片づけ	やっつけると	(ぞ)

か ^ㄊ リリヤ	ト ^ㄊ	ウ ^ㄊ ヌ	とウドゥ ^ㄊ	タヌマリルンディ	ム ^ㄊ ラキンミ ^ㄊ
k'a'rirja	to: ^ㄊ	u'nu	t'udu ^ㄊ	tanumarirundi	mu'ranjimm ^ㄊ
聞いているので	さあ、	その	人こそ	頼まれると	村吟味を

キティ	「イッてイン	ハン ^ㄊ	ハヤ ^ㄊ ル ⁽¹⁶⁾	とウン ^ㄊ タ ^ㄊ	アイ ^ㄊ ティー ^ㄊ
kiti	「itt'inj	han ^ㄊ	haja'ru ^ㄊ	t'un'ta ^ㄊ	ai'ti: ^ㄊ
して	一番	足の	早い	人たちを	歩いて、

アイ ^ㄊ ティー ^ㄊ ツール	とウン ^ㄊ タガラ	イラ ^ㄊ ビ ^ㄊ ティ ^ㄊ	ウツ ^ㄊ ティニ ^ㄊ
ai'ti: ^ㄊ ts'u:ru	t'un'tagara	ira'bi'ti ^ㄊ	ut'tini ^ㄊ
歩ける (歩き得る)	人たちから	選んで	急いで

イッティ	「かいシ	クーン ^ㄊ ディ	「かいダラシ ^ㄊ	ク ^ㄊ ブラ ^ㄊ
itti	「k'aiʃi	kun'di	「k'aidaraʃi ^ㄊ	ku'bura ^ㄊ
行って	ご案内して	来いと	使いに遣らせ、	久部良

ムラ ^ㄊ ガラ ^ㄊ	アバティティ	「スール ^ㄊ	とウ ^ㄊ ヤ ^ㄊ	サン ^ㄊ カイ ^ㄊ
mura'gara: ^ㄊ	abatiti	「su:ru ^ㄊ	t'u'ja ^ㄊ	san'gai ^ㄊ
村から	慌てて (急いで)	来る	人は	サンカイ

イス ^ㄊ バンキ ^ㄊ	タン ^ㄊ ディ ^ㄊ	タシ ^ㄊ キ ^ㄊ トゥラシワイヒリ	ン ^ㄊ ナ ^ㄊ イ	イリサ
isu'ban ^ㄊ ki ^ㄊ	tan'di ^ㄊ	taʃi'ki ^ㄊ turaʃiwai çiri	n'na ^ㄊ i	i'risa
イスバに	どうぞ	助けてやって下さい。	今	西崎

ティンキ ¹	マーランニヌドゥ	チカユシ	アイグカ [°] ー	イ ¹ クク	タイククヌ ¹
tin̄ki ¹	ma:ranninudu	t̄fikajuʃi	aiguŋa:	i ¹ kuku	taikukunu ¹
の方に	マーラン船が	近寄って	くるが、	異国	大国の

ハイ ¹ ランたカ [°] ドゥ	ヌイブルン ¹ ディ ¹ ドゥ	バー ¹	ムラヌ	とウン ¹ ディヤ ¹
hai ¹ rant'aju [°] du	nuiburun ¹ di ¹ du	ba: ¹	muranu	t'un ¹ dija ¹
追い剥ぎがぞ	乗っているとぞ	私の	村の	人たちは

ヌグラヌンディ ⁽¹⁷⁾	ム ¹ ラヤ ¹	イクツファー	キリティ ⁽¹⁸⁾	ン ¹ ダンキドゥ ¹
nuguranundi ¹	mu ¹ raja ¹	ikuts'a:	kiriti	n ¹ dan̄kidu ¹
残らないといって、	村(人)は	大騒ぎ	して	貴方に

タ ¹ ンディ ¹ ンディ		ニカ [°] イ ¹ てィ ¹	カイ ¹ シ ⁽¹⁹⁾	クーン ¹ ディドゥ
ta ¹ ndi: ¹ ndi ¹		niŋai ¹ t'i ¹	k'ai ¹ ʃi	ku:n ¹ didu
どうぞ(助けて下さい)と		お願いして	お迎えして	来ようといって、

「アイ ¹ グリャ	タン ¹ ディ ¹	タシ ¹ キ ¹ トゥラシ	「ワイ ¹ ヒリン ¹ ディ ¹
'ai ¹ gurja	tan ¹ di ¹	taʃi ¹ ki ¹ turaʃi	'wai ¹ çirin ¹ di ¹
あるくので	どうぞ	助けてやって	下さいといって

ツァーリタバ ⁽²⁰⁾	「エ ¹ イ	ウン ¹ ニナ ¹ イ	シバキン ¹ ナディ ⁽²¹⁾
ts'arritaba	'je ¹ i	un ¹ nina ¹ i	ʃibakin ¹ nadi ¹
申し上げたらば、	ああ	そうなのか。	心配するなど

ン ¹ ディ ¹ ワイ	ン ¹ ディ ¹ ワイ ¹ ティ ¹	イ ¹ リバタ	トゥンカイ	ンニャ ¹
n ¹ di ¹ wai ¹	n ¹ di ¹ wai ¹ ti ¹	i ¹ ribata	tun̄kai	nnja ¹
おっしゃって、	おっしゃって、	西側を	振り向いて	見ると、

チマンキ	チカユシドゥ	「ンナ」リビ	「ト」ー	「クヤ	ドウダンキヤ
tʃimaŋki	tʃikajuʃidu	ʃnnaʃribi	ʃto:	ʃkuja	dudaŋkija
島の方へ	近寄って来るのがぞ	見えるので	ああ、	これは	油断しては

ナラヌン「ディ	「イリサティヌ」	タガクバダマンキ	トゥ「バシ	イティティ
naranunʃdi	ʃirisatinuʃ	tagakubadamaŋki	tuʃbaʃi	ititi
ならないと、	西崎の	高クバ山へ	走って	行って、

クバナ	キニムトゥ	ティツキ ⁽²²⁾	ヌディティ ⁽²³⁾	ウン「ナガニ」	ウル
kubanu	kinimutu	tikki	nuditiʃ	unʃnaganiʃ	uru
クバの	木の根元を	引き	抜いで	海の中に	いる

マーランニンキ	ナキトウバシヤ	「かッ」てィ	ダマヌ	ク「バ」
ma:rannŋki	naʃitubafija	ʃkʃatʃti:	damanu	kuʃbaʃ
マーラン船へ	投げ飛ばし	捨てて、	山の	クバが

ミーヌン「キ」	ナル「タ」	ブンカシ	かってィー	かてィ「ガラー」
mi:nunʃkiʃ	naɾuʃtaʃ	bunʃkaʃi	kʃattʃi:	kʃattʃiʃgaraʃ
なく	なるまで	投げ飛ばし、	捨て、	捨ててから

イス「バヤ」	ツバラヌ	ウン「ナガ」	トゥン「カイ	ンニヤ」
isuʃbajaʃ	tsubaranu	unʃnagaʃ	tuŋʃkai	nnjaʃ
イスバアブは	後方の	海の方を	振り向いて	見ると(船は)

チマガラ	「ミヤー」ルンキ	ハナリ	ヒー	マ「タ」	ウヌ	ンニヌ
tʃimagaraʃ	ʃmjaʃruŋki	hanari	çi:	maʃtaʃ	unu	nninu
島から	遠くの方へと	離れて	行っており、	また	その	船の

とウンタ「ヤ」	クヌ	チマニヤ	「クンニヌ」	ウ「ブキタル	てイーサッてイ」
t'unta'ja'	kunu	tʃimanija	'kunninu'	u'bukitaru	tʃi:satt'i'
人たちは	この	島には	これほどの	大きな木を	引き抜いて

ブンカシ	「つ(ー)ル」	ブッチヌ	「ブンスヤ	クヤー」	デヤーディ「ンディ」
buŋkafi'	'ts'su'ru'	butʃinu	'bunsuja	kuja:'	dja:di'ndi'
投げ	きれる	武士が	居るのは、	これは	大変だと

チマンキドゥ	カイ「シ」	ヒュー「ルン」ディ	ンドゥガドゥ	「ウヌ」
tʃimanʃkidu	kai'ʃi'	ɕu:'run'di	nduŋadu	'unu'
(自分の) 島へと	帰って	行くのだと	言うのだが、	その

イスバ アブヤ	ウブ「ギヌ」	クバツ「たルンディ」	つアヌ ⁽²⁴⁾	ハバ	ムン「チ」
isuba abuja	ubu'ginu'	kubat't'arun di'	ts'anu	haba	mun'tʃi'
イスバ アブは	大きな木の	クバを	草の	葉を	筆り

トゥルン「ニ」	「ウン	ナガヌ	ンニンキ」	ブンカシ	ウイ「ダシティ	ト」ウ
turun'ni'	'un	naganu	nninʃki'	buŋkafi	ui'daʃiti'	to'u
取るように	海の	中の	船に	放り投げ	追いやって、	もう

ナイガラヤ	シバ「ミヌリヤ」	トゥ「グットウ ⁽²⁵⁾	キリ「ン」ディ
naigaraja	ʃiba'minurja'	tu'guttu	kiri'n'di
今からは	心配ないから	安心	しなさいと

ンディ「ワイティ	イスバ アブヤ	「ンマ」ナガンキ	カイ「シ」ワタバ
ndi'waiti'	isuba abuja	'mma'naganʃki	kai'ʃi'wataba'
言われて	イスバ アブは	島仲村へ	帰って行かれたので、

「クンニヌ	とウンディン」	ワイ「ビ」	タシ「キ」ワイヒー
「kunninu	t'undinj	wai「bi」	taʃi「ki」waiçi:
こんなすごい	人が	おられて、	助けてくださって

フガラッ「サンディ」	ウヌ	「とウヌ」	シカ「ラヤ」	ちルマル ⁽²⁸⁾
ɸugaras「sandi」	unu	「t'unu」	ʃika「raja」	tʃ'irumaru
ありがとうと（言って）	その	人の	力は	不思議な

ク「トゥ」	タ「ダヌ	とウヤ	アラヌン」ハディン「ディ」	チムガラ
ku「tu」	ta「danu	t'uja	aranun」hadin「di」	tʃimugara
ことだ、	ただの	人では	ないはずだといって、	心から

フガラッ「サンディ」	ウムイダッタナ	「クラシブタンディドゥ」	ンドウガドゥ
ɸugaras「sandi」	umuidattana	「kurafibutandidu」	ndugadu
ありがとうと	思いながら	暮していたと	言われるが、

ウン「カランディ」	ンドゥンスヤ	マ「タン」	ウン「ニヌ	クトウドゥ
un「kara:ndi」	ndunsuja	ma「tan」	un「ninu	kutudu
それからと	いうのは	までも	このような	ことで

アイガラ」	ク「ヤ」	チャーディ	ウン「タてィヌ」	ハ「マイドゥ」	ナル
aigara」	ku「ja」	dja:di	un「tatt'inu」	ha「maidu」	naru
あつては	これは	大変だ、	彼らの	食糧に	なる（だけだ）。

ク「ミヤ」	ブラ「ニヌリヤ」	バン「たディ」ー	アディヌ
ku「mija」	bura「ninurja」	ban「t'adi」:	adinu
ここには	居られないから	私たちは	按司の

ダシキンキ「ドゥ	クイ	マチ	アラヌナー「ンディ	ギン「ミ」
dafikiŋki「du	kui	matʃi	aranuna:ʔndi	gim「mi」
屋敷に	引っ越すのが	良い	のではないかと	吟味

キル「タ」シー	「ブール	ウンニドゥ	マチンディ	イタ」	アディヌ
kiru「ta」ʃi:	「bu:ru	unnidu	matʃindi	ita」	adinu
したので	皆	そのようにするのが	良いと	いって、	按司の

ダシキンキ	「クイティ	ムラタティキ	マタ」	ウミ「ヤ」	アディヌ	ダーン
dafikiŋki	「kuiti	muratatiki	mata」	umi「ja」	adinu	da:ŋ
屋敷へ	引っ越して	村を建てたので、	また	そこは	按司の	家も

「ア」イ	アディン	ワタバ	ナイ「ンドゥ	アタヤ「ンディ
「a」i	adiŋ	wataba	nai「ndu	attaja:ʔndi
あり、	按司も	居られたので、	今こそ	あるべき姿だといって、

「ブール	シャー「ナキ ⁽²⁷⁾	クラシ	ブルタシー」	ウン「ナガンキ」
「bu:ru	ʃa:ʔnaki:	kurafi	burutafi:」	un「nagaŋki」
皆	喜んで	暮して	いたが、	海の方に

たー「ル」	クトウドゥ	「マタ	チニ	カガイ」	ク「マン」	ウドゥブサドゥ
t'a:ʔru」	kutudu	「mata	tʃi:ni	kagai」	ku「maŋ」	udubusadu
近い	ことが	また	気に	かかって	ここも	危険で

「アルン」ディ	「マタ」	ギン「ミ」	キティー	ナイ「ヤ」
「arun」di	「mata」	gim「mi」	kiti:	nai「ja」
あるとて、	また	吟味	して	今は

タ「バミンディ」ンドゥ	ドウグルン「キ」	クヤシ	ムラダティ	「キー」ブンカ°ドウ
ta「bamindi」ndu	duguruŋ「ki」	kujafi	muradati	「ki:」buŋjadu
タバミ (地名) という	所に	引っ越して	村建て	しているが (ぞ)

ウン「ニティン	イリサティンキ	たードウ ⁽²⁸⁾	アル	「チム」
un「nitiŋ	irisatiŋki	t'a:du」	aru	「tʃimu」
それでも	西崎の方に	近く (ぞ)	ある。	心が

シバナ	トゥ「グットウ」	キラニヌン「ディ	マタ	ウイダ (一) トゥニドゥ
ʃibanu	tu「gu'ttu」	kiraninun「di	mata	uida:tunidu
心配で	落ちつくことが	できないといって、	また	上里 (地名) に (ぞ)

シーダイ	クラシ	マチンディ」	イ「リサティトゥ」ン	「トゥワールンディ ⁽²⁹⁾
ʃi:dai	kurafi	matʃindi」	i「risatitu」n	「t'uwa:rundi
ずっと	暮すのが	よいといって、	西崎にも	遠いからと

ギンミヤ」	マトゥマイ「ティ	イル」カ°	「ウイダートゥニヤ	ミーンドゥ
gimmi:ja」	matumai「ti	iru」ŋa	「uida:tunija	mi:ndu
吟味は	まとまって	それでも	上里には	水が

ミンヌンガ°	ヌ (一)」キルン「ガ (一) ン」ディ	「ギンミ」	キル「タ」シ
minuŋga	nu」kiruŋ「ga'n」di	「gimmi」	kiru「ta」ʃi
ないが (ないので)、	どうするかといって	吟味	すると

「カ (一) ドウ」	フラリルンディ	「タ (一) ダ」	マニ ⁽³⁰⁾	「カ (一)	フィティ (一)」
「ka'du」	ɸurarirundi	「ta'da」	mani	「ka	ɸuiti」
井戸を	掘ろうと	短期間の	中に	井戸を	掘って、

マ「タン	ムラ」	クヤシ	「アラ」ムラ	「タてィー	マ」ー	ンドゥグ
ma「tam	mura」	kujafi	「ara」mura	「tatt'i:	ma」:	ndugu
またも	村を	引っ越して、	新村を	建てて	もう	移動する

クトゥ	ナラヌン「ドーンディ」	ク「ラシ	ブルダ」シ	クヌ
kutu	naranun「do:ndi」	ku「rafi	buruta」ji	kunu
ことは	できないぞとって	暮して	いると、	この

「ダーニ」ン	カ「ヌ	ダーニ」ン	マリカ°ブ「キー」 ⁽³¹⁾	ム「ラヤ」
「da:ni」ŋ	ka「nu	da:ni」m	marigabu「ki:」	mu「raja」
家にも	あの	家にも	赤ちゃんが生まれて	村は

サガタバ	「ブール	シャーナキ	クラシ」	ブン「カ°ドゥ	マリル」
sagataba	「bu:ru	ja:naki	kuraji」	buŋ「ŋadu	mariru」
栄えたから	みんな	喜んで	暮して	いるが、	生まれる

アガミンタ「ヤ」	フドゥイ ⁽³¹⁾	クンス「ヤ」	ア「ラー」グ	マ「リ
agaminta「ja」	φudui	kunsu「ja」	a「ra:」gu	ma「ri
子供たちは	成長して	くるのは	大変に	生まれの

アビヤル ⁽³²⁾	アガミン「タ」ドゥ	「アイ」ブンカ°ドゥ	「トゥチ」グル
abjaru」	agamin「ta」du	「ai」buŋŋadu	「tutji」guru
美しい	子供たちで	あるが、	年頃に

「ナイ」クリャ	「ヌー」	ダミンディ	ミ「ヌンキ	カタ」グティガラ	「とウイ」
「nai」kurja	「nu:」	damindi	mi「nunki	kata」gutigara	「t'ui」
なってくると	何という	病気という	ことはないが	かたっぱしから	一人

ヌグラヌンキ	ン「ニヤ	ヒ「ー	ヒタバー	ク「ヤ	ムナち「ン
nuguranun̄ki	n̄'nija	çī':	çitaba:	ku'ja	munatf'ī'm
残らずに	死んでは	行き	していったので、	これは	不思議だ、

「マーリ「ク	ア「ガミンタヤ「	スダッティリヤドウ	「ムラン	サガイ「
'ma:ri'ku	a'gamintaja'	sudattirjadu	'muran	sagai'
生まれてくる	子供たちは	成育して行ってこそ	村も	栄え、

ハンドウ ⁽³³⁾	キ「ルー	クヤ「	ムヌ	トゥチン	カンガ「イラヌトゥ「ヤ
handu	ki'ru:	kuja:'	munu	tutfin̄	kan̄gairanutu'ja
繁盛も	する。	これは	何か	一つ	考えないと

ナラヌン「ディ	「マタ	ムラギンミ「	キティドウ	ナイ「ヌ「	ドゥグルン「キ
naranun̄'di·	'mata	muragimmi'	kitidu	nai'nu'	dugurun̄'ki
いけないと	また	村吟味を	して(ぞ)	今の	所に

クイ「ク	クトウン「キー	ハナシ「	キマイ「ティ「	ナイバギン	ンディムラ
kui'ku	kutun̄'ki:	hanafi'	kimai'ti·'	naibagin	ndimura
引っ越してくることに		話が	決って、	今までも	比川村

ンディ	タッてイブル	「マタ「	ン「ディムランディ	ナー「	キャン「スヤ「
ndi	tatt'iburu	'mata'	n̄'dimurandi	na:'	k'jan'suja'
とって、(村が) 建っている。		また	ンディムラと	名前を	つけたのは

ン「マ「	フタンティン	「バてイミガ ⁽³⁴⁾ 「	ンディ	「マタ	ウヌ	ミンヤ「
m'ma'	ɸutantim	'bat'imin̄ga'	ndi	'mata	unu	mijja'
どこを	掘っても	湧き水が	出て、	また	その	水は

アマミン「バガイドゥ」 ンディルユンガラ「ドゥ」 ンディミン
 amamim「bagaidu」 ndirujungara「du」 ndimim
 甘水（淡水）だけ（ぞ）が 湧き出るので（ぞ） 出水（湧水）、

「バてィミンヌ」 タティガラドゥ⁽³⁵⁾ ンディム「ラーンディ」 ナーキ「アラヌタ」
 「batt'iminnu」 tattigaradu ndimu「ra:ndi」 na:k'i「aranuta」
 湧き水の 例から（ぞ） 比川村と 名付けたのではない

カ「ヤーン」ディ ウマリール「ユー」 「マタ」 クヌ ムラヤ ハナシニ
 ka「ja:n」di umari:ru「ju:」 「mata」 kunu muraja hanafini
 かなあと 思われますよ。 また この 村は 話に

「アルー」 イチトゥグル ムティナシ ナイ「ヌ」 ドゥグルドゥ クマ「ドゥ」
 「aru:」 itʃituguru muttinafi nai「nu」 dugurudu kuma「du」
 ある 五ヶ所に 移動して 今の 所（ぞ）、 ここで

アッタ「ヤ」 ダイ「ドゥブ」 シー「ダイ」 シバミンヌン「き」 ブラリルン
 atta「ja」 dai「dubu」 ʃi:「dai」 ʃibaminun「k'i」 burarirun
 あったら 大丈夫、 未代 心配なく 居られる。

トゥハイムン「たヌ」 ミツ「キラヌリヤ」 クブ「ラニ」 グワン
 t'u'haimun「t'anu」 mik「k'iranurja」 kubu「rani」 gwan
 人食い者（人）たちがは 見つけられないから、 久部良に お願（お嶽）を

タてィ とゥ「ハイ」ムヌン「たー」 シー ヒン「ナーンディ」
 tatt'i t'u「hai」munun「t'a:」 ʃi: ɕin「na:ndi」
 建てて、 人食い人たちは 来て くれるなど

ビディリ ⁽³⁶⁾ ㄱ	タッてィ	ウㄱカ°ミ ㄱ	サンㄱカ°イ ㄱイ°スㄱバカ°
bidiri ㄱ	tatt'i	u ㄱŋami ㄱ	saŋ ㄱŋai ㄱisu ㄱbaŋa
ビディリ(靈石)を	建てて	拝み、	サンカ°イイスバが

ンミワインㄱダキ°ヌ	ㄱフッてィンキヌ	ち ⁽³⁷⁾ ー ㄱ	くイㄱティ ㄱ
mimiwain ㄱda ㄱŋinu	ㄱfuttinginu	tʃ'i: ㄱ	k'ui ㄱti ㄱ
履いておられるほどの	大きな	草鞋を	作って、

ビㄱディリンキー ㄱ	イクㄱク ㄱ	タイククジン	クラミヒンㄱナー ㄱンディ
bi ㄱdirinki: ㄱ	iku ㄱku ㄱ	taikukuŋin	kuramiçin ㄱna: ㄱndi
靈石に	異国	大国人を	来らして下さるなどいって

ニㄱカ°イティ	くワール ㄱ	ちー	ㄱイリサティンキ ㄱ	ナガラシ	ㄱクヌ
ni ㄱŋaiti	k'wa:ru ㄱ	tʃ'i:	ㄱirisatingki ㄱ	nagarafi	ㄱkunu
祈願して	作ったところの	草鞋を	西崎に	流して	この

チマニヤ ㄱ	ウンニㄱヌー	フー ㄱティンキヌ	とウンㄱタン ㄱカ°ドゥ ㄱ
tʃimanija ㄱ	unni ㄱnu:	çu: ㄱtinginu	t'un ㄱtaŋ ㄱŋa ㄱdu ㄱ
島には	これほどの	大きな	人たちが

ブルㄱドー ㄱンㄱディ	ンナ ㄱ	ウドウルガシ	ㄱキタル ㄱ	ムヌンㄱカ°ドゥ
buru ㄱdo: ㄱn ㄱdi	nna ㄱ	udurugaŋi	ㄱkitaru ㄱ	munuŋ ㄱŋadu
居るんだぞと、	ただ	驚かせ	した	ものが(ぞ)

クブラヌ ㄱ	マチリヤ	ㄱナイ ㄱブㄱルーン ㄱディ	アルㄱユ ㄱー
kuburanu ㄱ	mattʃ'irija	ㄱnai ㄱbu ㄱru:n ㄱdi	aru ㄱju: ㄱ
久部良の	祭には	なっていると	ありますよ。

サン「カ ⁽³⁸⁾ イ」イスバ	アブンディ ⁽³⁹⁾	ン「ディ」ワル	トゥ「ヤ	ナイ」
sanʔgaiʔisuba	abundi	nʔdiʔwaru	tʔuʔja	naiʔ
サンカ ⁽³⁸⁾ イスバ	アブと	言われる	人は	今の

ティン「ダ」バナタ「ヌ」 ⁽⁴⁰⁾	カタバラニ	ウヌ	「とウヌ」	シキ「ヒカ
tinʔdaʔbanataʔnuʔ	katabarani	unu	tʔunuʔ	ʃikiʔçiŋa
ティンダバナタの	側に	その	人の	石碑が

ア「イ	ウンカ	ウツ「ツ ⁽³⁸⁾ ニ」	バ「サク」アミティンカ	アイ「ティー」
aʔi	uŋŋa	utʔtsu:niʔ	baʔsaŋuʔamitiŋŋa	aiʔti:ʔ
あり、	その	後に	岩の割れ目の道が	あって

ウ「チンキ」	ニー	ウシ「ティ」	アイガミリヤ	ウヌママ	「アイティドゥ」
uʔtʃiŋkiʔ	ni:	uʃiʔti:ʔ	aigamirja	unumama	ʔaitiduʔ
牛に	荷を	負わせて	歩かせると	そのまま	歩いて

ブン「ガ ⁽³⁸⁾ ー」	イス「バ」アブ「ヤー」	ウヌ	バサ「ク」アミティ「ガラ」
buŋʔŋa:ʔ	isuʔbaʔabuʔja:ʔ	unu	basaʔŋuʔamitiʔgaraʔ
いるが	イスバアブは	その	岩の割れ目の道の（切り通し）から

ウヌ「ティ」	カヌ「ティ」	フィ「ティー」	マンカ	アイガヌンキ
unuʔtiʔ	kanuʔtiʔ	ʃuiʔti:ʔ	maŋka	aiganuŋki
この手	あの手を	振って	真直に	歩けないので

ダガ「タ」ドゥ ⁽⁴¹⁾	サ「ティ	ナシティー」	アイ「ティ」	ワタルンディ
dagaʔtaʔdu	saʔti	naʃiti:ʔ	aiʔtiʔ	watʔarundi
体の横脇を	先に	なして	歩いて	おられたという。

ウヌ	サグ「ヌ	マイサル」	とウドウ	「アイ」ワタルンディヌ	ハナシ
unu	sagu「nu	maisaru」	t'udu	「ai」wat'arundinu	hanafi
その	くらいの	大きな (巨体の)	人で	あられたという	話。

《語釈》

- (1) [hadimija·] (始めは、起原は)。与那国方言では、国語のザ行子音が [d] に対応する。つまり、ザ→da、ジ→di、ズ→di、ゼ→di、ゾ→du となる音韻法則が認められる。[-ja·] は「とりたて」の係助詞「は」。
- (2) [ndariburu] (言われている)。
[nduŋ] (言う) の受動表現。
[buru] (をる) は、[buŋ] (居る) の連体形で補助動詞的用法。
[nduŋ] (言う) は、石垣方言の [ʔidzuŋ] (言う)、鳩間方言の [ʔiʔdzuŋ] (言う) に対応する語で、(1) の音韻法則に基づくもの。与那国方言が八重山方言系から分岐したものであることを示す。
- (3) [tati^hŋutija] (建ち始めは)。
[tati-] (建ち) は、動詞 [tatuŋ] (立つ) の連用形 [tati-] (立ち) に、[ʔi] (口) が結合して複合語 [tati^hŋuti] (立ち口、立ち始め) が形成されたもの。この語は、与那国方言の無気喉頭化音の生成過程を立証する貴重な資料である。与那国方言には、「母音間のカ行子音は有声化し、ガ行子音は鼻濁音化する」という音韻法則が認められる。従って、この語は、[tati-guti] (立ち口) が複合語化する過程で鼻濁音化の音韻法則により生成されたものと考えられる。そして、それは [kuti] (口) の [ku] が無声化して脱落する以前に複合語化が生成されたことを示している。その後、[kuti] は無声化を経て1拍脱落の現象が起き、無気喉頭化して [ʔi] (口) となっている。
- (4) [dutʃikunidu] (裕福に・ぞ)、[jutʃiku] (「裕福」、首里方言、鳩間方言) の [ju] が語頭のヤ行子音の音韻法則により /j/ → /d/ と変化したもの。
- (5) [nduŋa] (言うが)。
動詞 [nduŋ] (言う) に接続助詞 [ŋa] (～が) の下接した形。(2) 参照。
- (6) [nninudu] (船が・ぞ)。
[nni] (船) は [ɸuni] (船) の第一拍の [ɸu] が続く鼻音に同化(逆行同化)されて生成された形。
[nudu] は、格助詞 [nu] (が) に係助詞 [du] (ぞ) が結合したもの。助詞連語。
- (7) [irisatiŋkidu] (西崎へぞ)。
与那国方言では、母音間のカ行子音は有声化する。特に、カ行イ段音においては、奈良時代中央語のカ行イ段甲類に対して、与那国方言のタ行イ段音 [ti] が対応する。例、[duti] (雪「由伎甲」)、[sati] (岬「佐伎甲」)。

- (8) [nnaritaba] (見えたので)。[nnuŋ] (見る) の可能表現。[nnu:] (見よう)、[nnanuŋ] (見ない)、[nnunna] (見るな)、[nnu:t'u] (見る人)、[nnuŋ] (見る)、[nniba] (見たら)、[nni:] (見よ)、[nnibuŋ] (見ている)、[nnjaŋ] (見た) のように活用する。
- (9) [nai^ɾnu] (今の)。石垣方言では [nama] (今)、鳩間方言では [manama] (今)、石垣方言 (古老)、小浜方言では [minama] (今) という (『八重山語彙』)。
- (10) [haira^ɾ] (追いはぎ)。[hairo:] (追剥) 又は [pauro:] (追剥) ともいう (石垣方言、黒島方言)、[pairu] (追剥) (鳩間方言)。
- (11) [^ɾnu:^ɾkiru] (どうする)。^ɾ[nu:] (何。いかに) に [kiru] ([kiruŋ] 〈為る〉) の連体形) が結合して形成された連語。
- (12) [t'ja:] (聞くところによると)。* kiku の第一拍が無声子音に挟まれて、狭母音 [i] が無声化し、脱落したことにより、第二拍の無声子音が無気喉頭化して形成された動詞 [k'uŋ] (聞く) の条件形。因に、[k'u:] (聞こう)、[k'anuŋ] (聞かない)、[k'uŋ] (聞く)、[k'ut'u] (聞く人)、[k'uŋ] (聞く)、[t'ja:] (聞けば)、[k'i:] (聞け)、[t'ibusan] (聞きたい)、[tjaŋ] (聞いた) のように活用する。カ行四段動詞の連用形の末尾子音は奈良時代中央語の甲類に対応しており、これが無気喉頭化して [t'i] となる。従ってガ行四段系動詞は、並行的に [g] → [d] となる音韻法則が認められる。
- (13) [^ɾmma^ɾnaga^ɾmurani] (島仲村に)。「天蛇鼻」(地名) の上にあったといわれる村。与那国方言の語中、語尾の [k] は有声化して [g] へ、有声音 [g] は [ŋ] へ変化する。[mmanaga] の [ga] はこの音韻法則によるものである。[mmanaga] の [mma] は、[sima] の [fi] が続く両唇音に融合同化されたもの。与那国方言では、国語の「シ」が与那国方言の [tʃi]、[ki] に対応するので、上記の同化現象は、それ以前に起きたものであろう。
- (14) [ara:gu] (ものすごく、大変に)。この [-gu] も (13) に示した有声化、鼻濁音化の法則によるものである。
- (15) [gutt'ai] (身体)。「五体」の意から転じて「身体」、「体力」の意が派

生したものである。

- (16) [hajaru] (早い)。与那国方言の形容詞の活用は語幹に「有り」が直接して形成される点、鳩間方言と酷似する。因に形容詞 [tagaŋ] (高い) は次のように活用する。[tagaminuŋ] (高くない)、[tagagunarun] (高くなる)、[tagaŋ] (高い)、[tagarudama] (高い山)、[taganu nuraninuŋ] (高くて登れない)、[tagaruba nsatarunuŋ] (高ければよかったのに)、[tagarjataŋ] (高かった)。
- (17) [nuguranundi] (残らないとって)。動詞 [nuguruŋ] (残る) の未然形 [nuguranuŋ] に、引用の格助詞 [-di] (〜と) が下接した形。
- (18) [kiriti] (為て)。動詞 [kiruŋ] (為る) の接続形。因に、この動詞の活用形を示すと次の通りである。[kiru:] (為よう)、[kiranuŋ] (為ない)、[kinna] (為るな)、[kiruŋ] (為る)、[kiru'u] (為る人)、[kirja] (為れば)、[kiri] (為ろ)。
- (19) [k'aiji] (お迎えして)。石垣方言のチュ「カ」イシウン [tsi'ka'isiŋ] (招待する) に対応する語。鳩間方言では [si'kaŋi] (御案内して) という。この [tsikai] の第1拍の中舌狭母音が無声化し、1拍脱落して形成された語である。与那国方言が石垣方言系より分岐したものであることを示す語である。
- (20) [ts'a:ritaba] (申し上げたらば)。石垣方言の [sisariruŋ] (申し上げる)、鳩間方言の [s'saruŋ] (申し上げる) に対応する語で、第1拍の [si] の [i] が無声化して脱落することにより、第二拍の無声摩擦音 [s] が破擦音化して [ts] となったのが、更に無気喉頭化して [ts'a] となったものである。これは、「組踊」などの「知られ」(申し上げる) に由来する。「されされ 座主加那志」(『執心鐘入』)(『伊波普猷全集 第三巻』)。
- (21) [fiɸa-kin'na] (心配するな)、[fiɸa] の [ba] は、八重山方言ではワ行音に対応する。与那国方言では、語頭、語中、語尾において、この音韻法則が徹底している。[kinna] は、[kiruŋ] (為る) の禁止形。本来は *kiruna (連体形) であったものが、禁止の接辞 [-na] (〜な) を下接させることにより、活用語尾 -ru が続く鼻音に融合同化したものと考えられる。-ru 語尾が撥音 N に変化したものである。

- (22) [tikki] (引き)。動詞 [tikkiruŋ] (引っ張る) の連用形。
- (23) [nuditiː] (抜いで)。動詞 [nuguŋ] (抜く) の連用形に接続助詞 [-ti] (て) の下接したもの。カ行四段活用動詞の連用形の語幹末尾子音、-k- が -t- となる音韻法則があり、並行的にガ行四段活用動詞の場合は、-g- が -d- となる。奈良時代中央語の甲類に対応している。
- (24) [tsʰanu] (草の)。* kusa (草) の [ku] の狭母音 [u] が無声子音に挟まれて無声化し、一拍脱落することにより、続く無声摩擦音 [s] の破擦音 [ts] 化したものが無気喉頭化 [tsʰ] したものの。
- (25) [tuˈguttu] (安心)。[tuˈguttu kiruŋ] (安心する)。鳩間方言等の [tuˈkuttu] (安心、落ちつくこと) に対応する語。
- (26) [tʃirumaru] (不思議な)。与那国方言は、国語のハ行子音との間に次の音韻対応法則を有する。つまり、

国語のハ行音	ハ	ヒ	フ	ホ
与那国方言	ha	tʃi	ɲ	ɸu

従って、[tʃirumaru] は、[çirumasaŋ] (珍しい) 系統の形容詞で、その語幹 [çiruma-] に [aru] (有る) が下接した形である。

- (27) [ʃaːnaki] (喜んで)、石垣方言の [saniʃa] (嬉しさ、喜ぶこと) と同系統の語で、[saˈniŋkeːruŋ] (嬉しがる。嬉しく思う) (鳩間方言) と同様、形容詞 [saniʃaːŋ] (嬉しい) (竹富方言)、[ʃanaŋ] (嬉しい) (与那国方言) が動詞化したものである。
- (28) [tʰaːdu] (近くぞ)。形容詞 [tʰaŋ] (近い) の語幹に係助詞の [du] (ぞ) が下接した形。
- (29) [tʰuwaːrundi] (遠いからと)。[tʰuwaŋ] (遠い) の連体形に引用の格助詞 [ndi] (と、とて) が下接した形。
- (30) [ˈtaːdaˈmani] (短期間の中に)。石垣方言の [tadeːma] (忽ち、間もなく) (副詞) に対応する語である。国語の「唯今に」の転訛した語であろう。
- (31) [mariŋabuˈkiː] (赤ちゃんが生まれて)。首里方言の [siduːgaɸuː] (⊖頂戴物をする事、ありがたいものをいただくこと。⊖お礼。⊖妊娠。

首里の女のいう語。天から賜わった果報の意) (『沖縄語辞典』) の [sidu:] (孵化する、生まれる) が、与那国方言では、[mari-] (生まれ) に替置されている。[-ŋabu] (果報) の -ŋa は、語中の濁音 [g] が鼻濁音の [ŋ] に変化する音韻法則による。

(32) [abjaru] (美しい)。石垣方言では、「美」を表す形容詞に、① [ʔappariʃa:ŋ] (美しい、華麗なり) と、② [kaiʃa:ŋ] (美しい、奇麗なり) があり、①は人間 (女性) の美しさを表現する場合に用いられ、②は、その他に用いられる。①の系統に鳩間方言の [ʔa^hba^hre:ŋ] (女性が美しい) がある。与那国方言は、この系統に属する形容詞語構成法を有する。形容詞語幹 ([ʔabari] ≪あはれ≫) + 有り ([ʔaŋ] ≪あり≫) の語構成法に基づく形容詞で、与那国方言が八重山方言系統より派生したものであることを証明する。

(33) [handu] (繁昌)。与那国方言では、国語のザ行子音が有声の歯茎破裂音 [d] に対応する。つまり有声の摩擦音は、弱摩擦音も含めて、つまり有声の破裂音に変化している。例えば、[ada] (あざ)、[adi] (味)、[kidi] (傷)、[kadi] (風)、[midu] (溝)。拗音は直音化している。

(34) [ʔbat^himi^hŋa] (湧き水が)。与那国方言では、国語のワ行音が与那国方言のバ行音に対応している。/w → b/ の音韻法則が八重山方言の中でも最も徹底している方言である。また力行四段活用動詞の連用形 (奈良時代中央語の甲類に対応する) が法則的にキ [ki (甲)] → [ti] と音韻変化する現象に基づくもの。

(35) [tattigaradu] (例えからぞ)。[tatti] (たとえ、比喩)、[gara] (から、格助詞、動作、作用の起点)、[du] は、強意の係助詞。

(36) [bidiri] (ビディリ、霊石)。首里方言では [bidzuru] (賓頭盧神を祭ったところにある円形の石。仏像の形はしていない。[bindzuru] ともいう) といい、石垣方言では [bittfiri] (驅邪の目的にてT字路の衝に立てたる石神。泰山石敢當と記せり) (『八重山語彙』) という。鳩間方言では、ビ^hチ^hル [bi^htʃi^hru] という。これらの語例よりみても、与那国方言の [bidiri] は、tʃi → di の音韻法則により、石垣方言系より派生したものであることが知られる。

- (37) [ʔtʃiː] (草鞋を)。鳩間方言では [ɸʊtʃi] (草鞋←クツ≪靴≫、小浜方言では [fʊtsi] (草鞋)、波照間方言では [barafutsi] (草鞋) という (『八重山語彙』)。これより、[kʊtsu] (靴) の [ku] が、狭母音の無声化により第1拍が脱落し、続く第2拍の子音が無気喉頭化する音韻法則に基づいて形成された語であることが知られる。これも、与那国方言が八重山方言系より分岐派生したものであることを証明する。万葉語に遡源される古い語である。
- (38) [sanɟai isuba] (固有名詞、サンカ^oイ・イソバ)。与那国の伝説上の人物。女傑。強力無双の英傑として語り伝えられている。
- (39) [abundi] (祖母とて)。^o[abutʰa] (母親)、^o[abu] (祖母) (『与那国ことば辞典』池間苗著) とある。^o[abu] は奈良時代東国方言の「阿母」(万-4378)に由来する語である。因に鳩間方言では [ʔabu] (お母さん、母親) という。
- (40) [tin^oda^obanata^onu^o] (地名。「祖納部落の南にある海食崖。景勝地である」『与那国ことば辞典』池間苗著)。^o[tinda-] の語源は「落ちひら」(断崖)であろう。与那国方言の音韻法則に基づいて、語源を再構すると、上記のように結論づけられる。
- (41) [daga^ota^odu] (体の横脇を)。与那国方言には、語頭において、国語のヤ行音がダ行音に変化する音韻法則がある (/j/ → /d/)。
- また、語中の無声破裂音が有声化する音韻法則がある。従って、^o[dagata] は、^o[ja^oka^ota] (体の脇、側) (鳩間方言)、^o[jakada] (側、傍、近所) (石垣方言) (『八重山語彙』) とあることから、「体側、体の脇」を意味するものと考えられ、これも与那国方言が石垣方言系から派生したことを証明する。

参考文献

1. 宮良当壮 1930 『八重山語彙』 東洋文庫
2. 金城朝永・服部四郎 1955 「琉球語」(『世界言語概説』下巻) 研究社
3. 服部四郎 1959 『日本語の系統』 岩波書店
4. 柴田武 1959 「琉球与那国方言の音韻」(『ことばの研究』国立国語研究所論集一)
5. 服部四郎 1960 『言語学の方法』 岩波書店
6. 仲宗根政善 1961 「琉球方言概説」(『方言学講座』第四巻) 東京堂
7. 加治工真市 1961 「鳩間方言の音韻体系」(『琉球方言』第3号)
8. 上村幸雄 1962 「琉球方言」(『方言学概説』) 武蔵野書院
9. 平山輝男・中本正智共著 1962 『琉球与那国方言の研究』 東京堂
10. 屋比久浩 1963 「イッターとワッター —接尾形式の一考察—」(『沖縄文化』第13号)
11. 平山輝男・大島一郎・中本正智共著 1966 『琉球方言の総合的研究』 明治書院
12. 平山輝男・大島一郎・中本正智共著 1967 『琉球先島方言の総合的研究』 明治書院
13. 日本放送協会 1970 『全国方言資料 11』(琉球方言編Ⅱ) 日本放送協会総合放送文化研究所
14. 高橋俊三 1975 「沖縄県八重山郡与那国町の方言の生活語彙」(『方言研究叢書』第4巻) 三弥井書店
15. 中本正智 1976 『琉球方言音韻の研究』 法政大学出版局
16. 外間守善 1977 「沖縄の言語とその歴史」(『岩波講座 日本語 11 方言』) 岩波書店
17. 内間直仁 1980 「与那国方言の活用とその成立」(『黒潮の民俗・文化・言語』) 角川書店
18. 加治工真市 1980 「与那国方言の史的研究」(『黒潮の民俗・文化・言語』) 角川書店
19. 加治工真市 1984 「八重山方言概説」(『講座方言学 10 —沖縄・奄美の方言』) 国書刊行会

20. 平山輝男編 1988 『南琉球の方言基礎語彙』桜楓社
21. 上村幸雄 1992 「琉球列島の言語」(『言語学大辞典 第4巻<<世界言語編>>⑩2』)三省堂
22. 高橋俊三 1992 「(V)与那国方言」(『言語学大辞典 第4巻<<世界言語編>>⑩2』)三省堂
23. 澤瀉久孝 1970 『時代別国語大辞典 上代編』三省堂
24. 岩瀬博・松浪久子・富里康子・長浜洋子編著 1983 『南島昔話叢書10 八重山諸島与那国島の昔話』同朋舎
25. 池間苗 1998 『与那国ことば辞典』(自家版)
26. 与那国町教育委員会 2000 『与那国島の民俗と暮らしー第一分冊ー住居・墓・水ー』

(かじく しんいち・沖縄県立芸術大学美術工芸学部教授)